

2010年度(09/11~10/10)EPEクラブ活動報告

2010/10/E現在 板谷

連番	305	例会No.	一般176	内容	鈴鹿・日本コバ	実施年月日	2009/11/8	担当者	紀伊栞本、長瀬	
参加者	紀伊栞本節雄、長瀬茂正、寺島直子、安岡和子、寄川都美子、紀伊栞本博美、岸田暎子、谷村洋子、安本昭久、安本嘉代、秋田文雄、大西征四郎、奥中種雄、柴田弘子、田中智子、神阪洋子、小椋勝久、小椋美佐								参加者数	18
担当者コメント	<p>鈴鹿の山々はよく知っているようで、まだまだ知らない山が多い。日本コバもその一つである。ただ私の興味はこの山麓の小椋谷の木地師発祥の地にあった。あろうことか、山岳会の後輩である小椋さんは、この小椋谷の君の畑を墳墓の地とする末裔である。日本コバはその小椋谷の西の入口に門衛のように突立っている山だ。例会に日本コバを取り上げたのは、そんなところから始まったのが動機である。八日市からタクシーを使って蓼畑まで直行する(7000円弱)。タクシーを積極的に利用することで、近頃は日帰りの行動範囲が広がったのありがたい。八風街道を東へ永源寺ダムを廻り込んだところに蓼畑がある。愛知川はこの先で大きく屈曲するのだが、その前に北から小椋谷、西から小さく藤川谷が合流する。登山道はこの藤川谷沿いに山頂へと伸びている。1時間ほど登ると谷間が迫り、やがて左岸のせり上がったところに露岩が現れる。奇人の窟というのはその露岩の足元に井戸のような狭い落ち口があり、入ってみると底に水溜りがあってあまり快適な居住区とは云へない。露岩を越えるとその上はもう稜線の一角である。しかし、藤川谷はここを頸部としてその上部は大きく緩やかに広がり、その広がりや緩やかさはまるで読図勘を狂わしてしまう。ルートは北の尾根(そのまま西に大きく迂回すれば山頂に連なるが)から南の尾根に移って山頂に至るのだが、広い扇状の沢筋は渡るというより、横切るといほどの広さである。珍しい地形だと思ふ。それにしても、この平坦な尾根を覆う紅葉の素晴らしさは見事である。からだの芯まで黄金色に染まるのではなかろうか。O氏はこの情景はとても写真には収め切れないという。では各々方、ここはしっかり脳裏に焼付けるしかないだろう。下山路は一つ北側の尾根筋をストレートに政所まで下る。谷間に人家が望まれるようになってから、さらに一段ときびしい下りが待っていた。終了まで予定通りジャスト5時間である。タクシーとの約束時間までほんの僅かな間に小椋さんに話を聴く。天皇家直轄の「天下御免の許可証」は確かに存在するという。興味はさらに高まるが今日は歴史探訪ではない、ぐっと飲み込んでタクシーの待つ蓼畑へと急ぐのである。なお、日本コバとは奇妙な山名である。後ろの方で某氏方々はしきりに世界コバとか韓国コバもあるのだろうかと話している、ご尤もである。ある説では、山ヤの内で一休みすることを一本立てると言っていたが(確かにそうでした)この山は二本立てる間に登れるから二本コバ、変じて日本コバ(コバは小場か?)と呼ばれる様になったそうである。確証はない。現に我がパーティーは三本コバでありました。そしてまた、今日もありがたいことに快晴に恵まれた記:紀伊栞本(節)</p>									
連番	306	例会No.	一般177	内容	紀北・生石高原	実施年月日	2009/11/15	担当者	奥中、大西(征)	
参加者	奥中種雄、大西征四郎、紀伊栞本節雄、紀伊栞本博美、柴田弘子、仙谷経一郎、板谷佳史、岸田暎子、田中智子、津川洋子、寄川都美子、笠松マサエ、川崎喜美子、本郷善之助、小椋美佐、岩崎真美子、河野佐智子、和田都子、杉本栄子、岸本久仁雄								参加者数	20
担当者コメント	<p>50年ぶりの生石高原、どんなに変わっているのか興味津々。JR海南駅からタクシー5台(片道約3800円)に分乗し約30分、小川宮の八幡神社前で下車する。久しぶりに参加の方々も多いので神社境内で自己紹介の後、反時計回りのコースで出発する。しばらく舗装道路を進むと、左手に下山予定のサクラの小径の道標を過ぎ、小学校の手前で道がY字に分岐している。ここで右手に進む。この選択が誤りで、中田の集会場を経由し舗装道路を中田バス停まで歩くことになった。大観寺、弘法大師の押し上げ岩はパスすることになった。中田バス停から登山道へ入る。凹状の道は先日の大雨で落ち葉が道はしに堆積し、小石がゴロゴロ、下は粘土で滑り歩き難い道を登る。途中上から下ってくるKさんと合流する。やがて左右に別荘がみえ、左手に民営・国民宿舎がある。舗装道路を二箇所横断して一のぼりで「山の家おいし」に到着する。少し上にある笠石を風除けにして昼食をとる。約500mで生石ヶ峰(870.1m)山頂着、枯れススキに囲まれながら360度の展望を楽しむ。風になびくススキに背を押されるように、989年造営された生石神社(ショウセキと読む)へ下る。ご神体は一夜にしてできたといわれる高さ48mの岩峰である。昔のクライマーは自分の登攀ルート選定に余念がない。ここから旧札立峠へ下山する。舗装道路を二本横切り尾根道のサクラの小径へ下山していると思ったが、どうやら西側の梅本へ降りているようだ。下山したところは、小学校前の朝登る予定の登山口であった。八幡神社前からタクシーでJR海南駅へむかう。50年の歳月はあまりにも長い、残念ながら何一つ記憶に残っていなかった。 記:奥中</p>									
連番	307	例会No.	一般178	内容	丹波・黒井城址から五大山	実施年月日	2009/11/21	担当者	大西(征)、紀伊栞本	
参加者	大西征四郎、紀伊栞本節雄、西田保、本郷善之助、寄川都美子、奥中種雄、紀伊栞本博美、西村晶、青木義雄、寺島直子、仙谷経一郎								参加者数	11
担当者コメント	<p>各駅停車の窓から紅葉に見とれながら、2時間余りで黒井駅についた。降りたのは我々11名だけであるが、快晴の登山日和であった。駅前のお福(春日局)の像を見て、以前バス旅行でこの付近を通過したとき、ガイドさんから説明を受けたのを思い出す。春日局の生誕地で後年徳川家光の乳母となりNHK大河ドラマで町は賑わったと、その生誕地、興禅寺を散策後黒井城跡に向かうが「ようこそ丹波市春日町黒井へ」の案内があり健脚コース35分、一般コース35分とある当然健脚コースを選ぶが、石段が目に入り一般コースを選択する。当時馬が駆け下りたことを想像し、紅葉を楽しみながら若干汗ばむ程で赤門で一息入れる。黒井の町並、田園風景、遠望が素晴らしい。しばらく登ると荒々しい野面積みの石垣が目に入る。東曲輪跡である、所々で桜の紅葉が我々を迎えてくれる。三の丸跡、二の丸跡と感激しながら本丸跡に着いた。駅前から見た以上に広く、平坦で360度の大展望である、春には桜見物で賑わうが、黒井城跡に居るのは11名の兵のみ。急遽紀伊栞本氏に講師をお願いし、赤松筑前守の築城、赤井悪衛門の大改修、明智光秀等の大軍による落城の歴史、光秀の性格と信長との確執等そして、特注の地図を前にしての多紀アルプス等の説明があり、山行の楽しみが高まりました。五大山に向かって進むが、降り口は急坂で枯れ木の倒木でルートが複雑になり円形の平地の雑木林の中に「西の丸跡」の標識を見つけ、ホッとす。この先も雑木と枯れ木倒木で踏み跡を見失いその都度助けてもらう、雑木林の砦跡(千丈寺山)で昼食、歩を止めると上着が1枚欲しくなる、晩秋を肌で感じる。中休止後ヨコガワ峰に進む。所々で切り通し状の峠に出会う、我々は峠を越えるのに苦労するが、城を守る武士の気概に感激する。ヨコガワ峰から三日月山の行き先表示に出会う、地図上にはない(いや事前調査不足)若干不安であったが三日月山を無事通過し、五大山(白毫寺山)に到着する。黒井城跡、ここに至る稜線が手に取る様に遠望よしだが、雲が厚くなってきた。白毫寺へは老人、子供は危険との表示、案の定入口から急坂の連続そして踏み跡を捜すが枯れ木の倒木が待ち構え、倒木嫌えば雑木林に苦しむ、立派な標識とのアンバランス。倒木と戦いながら約40分で、白毫寺に到着し、その後雨に出会う。今回の山行は適当にアップダウンあり、急坂あり、岩場あり、獣害避けの金網あり、360度の遠望がよく、歴史を学び、そして天候にも恵まれ感謝しながら、市島駅17時12分の電車に揺られ、2時間余りで帰阪した。 記:大西(征)</p>									
連番	308	例会No.	一般179	内容	南近江・音羽山から逢坂峠	実施年月日	2009/11/29	担当者	紀伊栞本	

2010年度(09/11~10/10)EPEクラブ活動報告

2010/10/E現在 板谷

参加者	紀伊莚本節雄、奥中種雄、秋田文雄、大西征四郎、岸田暎子、本郷善之助、山田春雄、西田保、西村晶、達健一、紀伊莚本博美、寄川都美子、小椋美佐、安岡和子、吉田伸寛、谷村洋子、安本昭久、安本嘉代、齋藤容子、三木敬子、近藤さとみ、寺島直子、山本洋、仙谷経一郎、山岸悟、山岸郁子	参加者数	26							
担当者コメント	<p>今日は雨という予報だった。だが明けてみると快晴である。それにしてもいずれ降るかも知れず、石山寺の拝観は割愛した。4時間ほどの山道だが降られると厄介である。一行26名は大部隊である、余裕のある行動が望ましい。石山寺から音羽山をめぐるコースは、京都周辺の人々にとってはちょっとしたハイキングコースである。尾根筋までは植林帯を行くが、稜線に出ると自然林が広がる。きっと美しい紅葉に恵まれるだろうと見込んでいたが、高い梢に黄葉が残るほどで、残念ながら2週間遅かったかと思う。そのかわりに、落葉の埋まる山道の先に、はや低い冬空が望まれる。それもけって悪くはない。冬が来れば雪が降る。雪が降れば冬山が来る、冬山が来ればまた別の楽しみがやってくるのだ。2時過ぎには逢坂峠に着いた。峠の下には日本一と称するうなぎ料亭「かねよ」がある。なぜ峠の下に鰻屋があるのか？それは逢坂峠が昔々、京の都と東国を結ぶ名高い関所だったからだ。「これやこの行くも帰るもわかれては知るも知らぬも逢坂の関」蟬丸 Yさんが皆さんの要請に応じて、百人一首の有名な句を謡ってくれた。峠を行き交う様々な人の流れ、そこに人の世の離合集散の哀しみを感じるとは、いま私どもの歳にしてようやくしみじみと味わう事の出来る心情である。でも、そんな感傷も次の場面、鰻屋の行灯看板を前にして一瞬に失せてしまった。そうだ、今日はプラスアルファ鰻編である。そのために昼飯は早い目に、少な目に摂ってきたのだ。なかには席に付いてからも空腹に耐えかねたか、手持ちのパンを齧る人まで出た。和気あいあいのひと時である。誰もかも童心に帰り名物のきんし井を食ると、広い座敷が一刻声も無く静寂、やがて爆笑が戻った。愉快だ！面白い！これで寿命が少しは延びるだろう？また爆笑となる。料亭の庭にはまだ紅葉が残っていた。お帰りは、ねじり鉢巻の料理長のサービスでJR大津駅までバスで送ってもらった。次はぼたん鍋と決っているが、その次は何だろう。話題は尽きない。雨は遂に降らなかった。記：紀伊莚本(節)</p>									
連番	309	例会No.	一般180	内容	伊勢・青山高原	実施年月日	2009/12/12	担当者	奥中、長瀬	
参加者	奥中種雄、長瀬茂正、寺島直子、江本恭子、山下登志子、小椋美佐、寄川都美子、仙谷経一郎、本郷善之助、青木義雄、吉田伸寛								参加者数	11
担当者コメント	<p>このコースに決めたのは、電車から降りて直ぐに歩き始め、下山すれば直ぐに電車に乗れること、山頂での景観が素晴らしいことであった。無人の西青山駅を降りて、直ぐに古木の桜並木を通り、乗馬クラブを通過するとR165に出る。国道を東へ歩き、駅から約30分で登山口に出る。よく手入れされた植林の中を登って行くと、舗装道路に出る。このあたりは別荘地帯であり、ネットを下ろしたゴルフ練習場や、プール、テニスコート、立派な管理棟があるが、別荘はまばらにしか建っていない。誰かが呟いた「バブル時代に土地を買ったままかなー」急坂の515段の階段を登りきると青山高原の最高峰756mの三角点に出る。残念ながらあたりはガスで視界はゼロ、おまけに小雨までが降ってきた。頂上の休憩所・ブルーマウンテンの軒先を借りて早めの昼食をとる。下りは前半と違い地道で、景観も山中らしくなり、ガスも切れだして山歩きの気分になる。ほどなく上西ノ沢分岐に着き、左折し沢を何度か丸木橋で渡る。滝の落ち口から急坂を下り、一番目の滝の下の東屋に着く。水量も多く見応えのある立派な滝だ。ここから沢筋に入り、丸木橋や鉄橋を十回程渡る。程なく沢筋を離れ、急坂を登ると布引の滝が見られる滝見台休憩所に着く。緑の中に紅葉がちらほらすV字谷の中を、一枚の白い布を流したように四段の滝、素晴らしい眺めだ！！大休止する。下山中にガスも無くなり、一般例会No. 168で登った特徴のあるピーク、伊勢の矢頭山が見える。N氏の下見のお陰で予定通りの時間で歩くことが出来、無事例会を終了することが出来た。記：奥中</p>									
連番	310	例会No.	一般181	内容	和泉山脈のテーブルマウンテン	実施年月日	2009/12/20	担当者	紀伊莚本、翁長	
参加者	紀伊莚本節雄、翁長和幸、奥中種雄、大西征四郎、岸田暎子、本郷善之助、西村晶、紀伊莚本博美、寄川都美子、小椋勝久、小椋美佐、谷村洋子、安本昭久、安本嘉代、寺島直子、仙谷経一郎、田中智子、和田良次、和田敬子、柴田弘子、蒲田浩一郎								参加者数	21
担当者コメント	<p>堺南部から泉南にかけて、和泉山脈の中央部にテーブル状の山がよく見える。眺める位置や角度によって多少の変化はあってもその形はあまり変わらない。むしろ時間と場所、季節や天候によってドキッとするほど鮮やかな姿で現れる不思議な山である。地図の上で読めば鍋谷峠の経塚山(825m)がそれらしい。いつか確かめてみたいと思いながら今回ははじめてのトライである。経塚山から北に延びる尾根が白川谷の出合までしっかりと続いている。近刊のガイド地図には破線路のあることを後で知ったが、この尾根を登るのが一番手取り早い方法である。取り付きまでと、尾根の形状は前週に確認したので迷う事は無い。ただ林道からいきなり尾根上に出るため、かなりの急登から始まるので驚いてしまう。落石に注意しながら21名のメンバーが鈴生りに続くと、壮観と云うより危なっかしい方が気にかかる。尾根筋は植林と雑木の中で視界はない。そのうえ数日來の寒波で白い物が舞い始めた。どうも優雅なハイキングとは云い難い。1時間ほど登ると、2回目の急斜面が待っていた。急には違いないがダイレクトな尾根筋で、これは明らかにテーブル状の右肩に至るラインを登っていると自覚できた。今日も集合前に眺めてきたあのスカイラインを正になぞる様な気分である。取り付きから2時間弱で右肩に出た。これから東に約500mは平坦部が続く、テーブルの上縁に当たる部分で、たしかに長い平坦部である。中に2箇所の高点がある。825m地点と経塚の在る地点である。テーブルの左肩にあたる位置は、この経塚の在る地点だと思われる。すでに時刻は正午を過ぎていたが、念のため左肩の鞍部まで下ってこれをしっかりと確認した。そのあと「これにてテーブルマウンテンを確認しました」と、皆さんと一緒に面白おかしく宣言をした。愉快的雰囲気漂うのである。大袈裟に云えば、私の積年の思いはこれで解けた。経塚山がどこから見てもよく目立つのは、その特異な形状にもよるが、三国山から和泉葛城山に続く山並みから、この経塚山が西にほどよくはみ出ているからである。私の場合、山を眺める習慣はもともあつたが、低山わけても里山をいとおしく眺めるようになったのはごく近々である。試しにテーブルマウンテンの存在を2、3の山の知人に尋ねてみたが、確たる答えはない。さもあらん、40年近くこの山の見える近郊に住居する私がかくの如し、である。興味と関心の有無によって、人の目が何を捉えているかを考えると、我ながら随分面白いと思う。さて今日の山行が、今年最後の納山となった人も多いだろう。今年も存分に山行きを楽しむことの出来たのは幸せな人々である。そしてまた来るべき新年の健闘を誓い、ここで記：紀伊莚本(節)</p>									
連番	311	例会No.	OP124	内容	台高・木梶山	実施年月日	2009/12/23	担当者	板谷、安部	

2010年度(09/11~10/10)EPEクラブ活動報告

2010/10/E現在 板谷

参加者	板谷佳史、安部泰子、近藤さとみ、小椋美佐、安岡和子、柴田弘子、保木道代、黒澤百合子、長瀬茂正、寺島直子、江本恭子、川守田康行			参加者数	12					
担当者コメント	数日前に今冬一番の寒波が吹き荒れ、その後の好天に恵まれた例会となりました。台高の山もあなごれない積雪量となっていました。木梶山など昔は見向きもされなかった山と思いますが、山の雑誌でルート紹介等がされてから訪れる人も増えているようです。とはいえ、まだまだ主脈から外れた隠れたピークには違いなく一度EPEで例会を持ち、メンバーの方にも訪れて頂きたいと思っていました。今回年末のあわただしい時期ですが、そんな中で寒さ厳しくも静かで落ち着いた山行ができました。おかげで来るべき厳冬への気構えが出来上がった気がします。 記:板谷									
連番	312	例会No.	一般182	内容	新年ハイキング・三石山	実施年月日	2010/1/10	担当者	大西(恒)、大西(征)	
参加者	大西恒雄、大西征四郎、紀伊桒本節雄、紀伊桒本博美、奥中種雄、秋田文雄、磯辺秀雄、谷孝司、三原秀元、翁長和幸、板谷佳史、仙谷経一郎、安部泰子、松本明恵、安岡和子、岩本和行、柴田弘子、江本恭子、江本由貴、和田良次、和田敬子、小椋勝久、小椋美佐、永島健一、谷村洋子、田中智子、横内まみね、津川洋子、山田春雄、黒澤百合子、近藤さとみ、保木道代、寄川都美子、寺島直子、加福輝之、山下登志子、川守田康行、堀木宣夫、安本昭久、安本嘉代、岸田暎子、山本洋、吉田伸寛、岡本佳久、上原進一、三浦清江、杉本栄子、和田都子、藤田喜久江、河野佐智子、梶田誠寛、西村晶、西村美幸、實操綾子、笠松マサエ							参加者数	55	
担当者コメント	新年会とセットでの初歩きも8年目ともなるとコースも行きつくした感が有り、何度目かの三石山を巡るコースをたどりました。今年は新年会の前に遭対関係の研修会を開くため、時間的にも制約がありましたが、新年らしい穏やかな日差しの中、50数人という大人数でありながら人数を感じさせないまとまりで初歩きにふさわしい和やかな雰囲気です。2駅分の距離を予定した3時間半で歩くことができました。 記:大西(恒)									
連番	313	例会No.		内容	10新年会	実施年月日	2010/1/10	担当者	大西(恒)、大西(征)	
参加者	大西恒雄、大西征四郎、野口秀也、紀伊桒本節雄、紀伊桒本博美、本郷善之助、竹中喜三郎、岸本久仁雄、奥中種雄、秋田文雄、磯辺秀雄、三原秀元、西田保、翁長和幸、板谷佳史、仙谷経一郎、安部泰子、松本明恵、安岡和子、岩本和行、青木義雄、柴田弘子、江本恭子、江本由貴、和田良次、和田敬子、川崎喜美子、小椋勝久、小椋美佐、永島健一、徳平忠久、谷村洋子、田中智子、横内まみね、津川洋子、山田春雄、黒澤百合子、近藤さとみ、保木道代、寄川都美子、寺島直子、加福輝之、山下登志子、川守田康行、堀木宣夫、安本昭久、安本嘉代、岸田暎子、山本洋、吉田伸寛、岡本佳久、上原進一、三浦清江、杉本栄子、梶田誠寛、飛田典男、川下淳子、西村晶、西村美幸、笠松マサエ							参加者数	60	
担当者コメント	昨年のトムラウシでの出来事が、今回の新年会での遭対研修会開催のきっかけでありました。“ハイキングと遭難”有りえる事ですが、一般的には想定外だろうと思います。山岳会経験者でなかったゲスト会員には少し刺激的な事だったかもしれません。 トムラウシ遭難の解説と「非常事態宣言」の持つ意味と活用について 講師 板谷 装備の準備とその活用について 講師 大西(征) EPE規約と遭難対策について 講師 奥中 このテーマに対して、講師の力に負うところが多いと思いますが、年末までに続いた記憶に新しい遭難ニュースもあってか、参加者には違和感なくすんなりと受け容れてもらえたように感じました。宴会場に場を移しての新年会では、例年以上に盛り上がった様に感じました。特に恒例の福引では用意した景品以外に、写真額、絵画、手帳の提供もあって大いに沸きました。 記:大西(恒)									
連番	314	例会No.	一般183	内容	丹波・向山と清水山	実施年月日	2010/1/17	担当者	板谷、三原	
参加者	板谷佳史、三原秀元、岩本和行、紀伊桒本節雄、紀伊桒本博美、小椋美佐、田中智子、柴田弘子、近藤さとみ、寄川都美子、寺島直子、翁長和幸、仙谷経一郎、西村晶、大西征四郎、奥中種雄、安本嘉代、岸田暎子、谷村洋子、黒澤百合子							参加者数	20	
担当者コメント	「兵庫丹波の山(全2巻)」、「京都丹波の山(全2巻)」という本が刊行されています。これによると丹波高原の山として全部で約270の山が紹介されています。今回のように展望のきく山から重畳たる山々を眺めると納得のいく数字ではあります。全て登ろうという大それた欲がある訳ではないのですが、定年後のヒマにまかせて、中にはEPEの例会も含まれているのですが、45山ほど登っています。先の本では今回の清水山(きよみずさん)は、江戸時代の画家谷文晁が「日本名山図会」に描いた山の一つとして紹介されています。往きの列車の中から篠山口を過ぎると霧が深く立ち込めているのが眺められ、山上からの雲海を期待しましたが、石生に着くと晴れ上がってしまい、残念ながら山水画の世界にはひたれませんでした。石生は日本一標高が低い中央分水界の街として知られていますが、向山(むかいやま)はヒカゲツツジの群落地として登山者が多いようです。来る2月の高城山例会も丹波の歴史を秘めた山で、ボタン鍋目当てばかりでなく多少の歴史予習をされてから参加されたら更に楽しい山行になるのではないのでしょうか。交通の便の悪い山域ですが行きやすい山を選んで、丹波の山例会を続けたいと考えていますので、ご期待を。 記:板谷									
連番	315	例会No.	OP125	内容	東北スキー場めぐり・そのⅢ、安比	実施年月日	2010/1/24~27	担当者	紀伊桒本、大西(恒)	

2010年度(09/11~10/10)EPEクラブ活動報告

2010/10/E現在 板谷

参加者	紀伊桒本節雄、大西恒雄、翁長和幸、本郷善之助、内杉安繁、上原進一、宮平由紀子、笠松マサエ、山下登志子、寺島直子、杉本栄子、紀伊桒本博美、和田良次、和田敬子	参加者数	14
担当者コメント	<p>安比高原スキー場といえば、高原のど真ん中にある大きな円錐型の山頂。そこから放射状に、かつ直線的に引かれた幾筋もの真っ白いゼブラ模様。このコマースシャル写体ほどスキーヤーにワクワク感を募らせるものはない。一度は安比で滑りたい、あのゼブラ模様の上から下まで、端から端まで、東北から遠くに住む人ほどこの思いは強い。さてもさても思いは誰も同じだ、あんのじょう初日からホテルのチェックインも待ち切れず大半のメンバーが飛び出してしまった。まるで若者の様に昂揚した顔、そこには上手も下手もない、ただ喜びだけが溢れていた。二日目は低気圧の通過で湿雪に悩む。雪面は荒れる上にゴーグルに張り付く雪は視界を遮る。それでも皆さん黙々と練習に余念がない。昼だというのに薄暗く、午後3時頃にはナイター用ライトに照らされた。終わるにはまだ少し早いが「本日はこれにて終了」と指示を出す。「あと一本だけ」とせがむ熱心な人も出たが、危険は事前に察知するのが肝要だ、止め時がある。三日目は強い冬型気圧配置、気温は一転し、風は猛烈に強いが雪面は粉雪で覆われた。我々にしては絶好の練習日和、だが如何せんリフトが動かない。下部の2基のみを使って頑張るが、ついに午後には全面運休となる。あとは昼寝と温泉だけ。明日は好天と予測し、最終夜に催す恒例の宴会も中止とする。なんと午後8時半には就寝した。4日目は帰阪する日、午後3時までチェックアウトを延長していたのがよかった。申し分のない快晴である。午前8時半から開始して午後2時まで目一杯滑りたいという申し出もあったが、これも却下。激しい運動下の集中力はせいぜい2時間、血糖値の低下は怪我のもとだ。早目の昼食の後もう2時間、各自それぞれの腕前に合わせて存分に滑り捲くった。報告を集めると全員が上級者コースを滑ったことになる、凄いことだ。上級者コース専念組も結構多、さてここまで書いてふと思った、何と皆さん、我がもの顔でゲレンデを闊歩していることか、たしかにゲレンデは空いている。上級者コースといえども前後左右誰もいないとなれば、山ヤにとってはただの斜面、怖れるものは何もない。それにしても、周りは少数の若者と地元の小学生の外はルートルばかり、うれしくもあるが、寂しくもある。いったいどうなっているのか？ 20年ばかり前にはワンシーズン/160万人もの集客があったというこの安比高原、他の著名なスキー場も同様である。若者が見捨てたスキー場、温暖化雪不足のため閉鎖せざるをえないスキー場、赤字倒産のスキー場。まさか、東北スキー場巡りがここ数年で頓挫する事はないだろうが、かような外的要因が、決して我がルートルチームの可動年数を上回る事が無い様に祈りたい。暫し待たれよ、またも大法螺を吹くと言われようが、いったいいつまでスキーが出来るのだろうか。答えは皆さん異口同音、当面は80歳、その先は行けるとこまでアハハ、、まずは第10回東北スキー場巡りまで、予定は組んでありますゾナモシ。この拙文をお読み下さる皆様へ、どなた様もたった今から初心に帰ってスキーを始めましょう。今は正に100年に一度のチャンス到来です。ルートルスキーヤーの天国ですゾナモシ。 記:紀伊桒本(節)</p>		
連番	316 例会No.一般184 内容 湖南アルプス・笹間ヶ岳から堂山 実施年月日 2010/1/31	担当者	三原、大西(征)
参加者	三原秀元、大西征四郎、奥中種雄、仙谷経一郎、有永寛、安本昭久、安本嘉代、黒澤百合子、岸田暎子、堀木宣夫、田中智子、板谷佳史、谷村洋子、近藤さとみ、長瀬茂正、松本明恵、柴田弘子、小椋美佐	参加者数	18
担当者コメント	<p>私の担当例会はよく雨が降るので恐縮しております。今回も「昼ごろから雨」という予報に重い気分で大阪を出発する。JR石山駅よりタクシーに分乗して登山口の上関で下車、新茂智神社で身支度をして早々の出発とする。 笹間ヶ岳迄は地図上に表記されているが、それから先はガイドブック等を参考にして登山道が実際地図上のどこを通っているか、確認しながら進む。笹間ヶ岳頂上は畳3畳位の大きな岩の上で、これから向かう堂山やはるか遠くには三上山も遠望する事が出来る。下山は御仏河原を目指して松の木の茂る細い尾根道を下る。矢筈ヶ岳への道に合流してさらにザラザラとした花崗岩の谷筋を天神川林道へと下る。雨はまだ大丈夫な様なので次の目標の堂山へと急ぐ。迎不動から谷を渡り鎧ダムへの急な道を快調に進む。鎧ダムは明治22年竣工とあるので100年以上も前に出来た事になるが、今では完全に埋まってしまい地図にある湖など全く面影もない。やはり風化の激しい花崗岩の地形の特性だろうか、ダムを離れて緩い灌木帯を登って行く。尾根に出ると堂山がガスの中に見え隠れしている。ここからが長い、岩交じりのピークを4つ5つ超えて最後に大きな岩場を登ったところが頂上だ。たった384mの岩山だが結構スリルもあり楽しい山行でした。ちょうど頂上に着いたころより小雨ではあるが本降りとなってきたので天神川ダム方面へ下る。 今回の例会の山は両山共地形図に道は出ていないが実際には道は存在していた訳で、その道が何処へ続いているか、自分たちが行こうとする方向へ続いているのかコンパスで確認しながらの歩行は登山の原点に戻れた様で楽しいものでした。 記:三原</p>		
連番	317 例会No.一般185 内容 丹波・高城山(八上城跡) 実施年月日 2010/2/7	担当者	紀伊桒本、奥中、柴田
参加者	紀伊桒本節雄、奥中種雄、柴田弘子、青木義雄、紀伊桒本博美、堀木宣夫、近藤さとみ、柴田友宏、田中智子、牧田柳子、西村晶、磯辺秀雄、山本洋、岡本佳久、吉田伸寛、山下登志子、秋田文雄、小椋美佐、小椋勝久、津川洋子、本郷善之助、大西征四郎、笠松マサエ、安岡和子、西村靖晃、仙谷経一郎、畑山庄司、畑山禮子、内杉安繁	参加者数	29

2010年度(09/11~10/10)EPEクラブ活動報告

2010/10/E現在 板谷

<p>担当者コメント</p>	<p>快晴のハイキング日和を向かえた。昨夜に降ったという雪が八上城跡(高城山)一帯に薄化粧を施し、それがまた一層の詩情を讃えている。今日はハイキング+歴史探訪の後に+アルファ“ぼたん鍋”がある。だがたとえ喰い気が後に控えていても、その前に、天正7年(1579年)6月、この山で繰り広げられた明智光秀軍と波多野秀治率いる八上城守備隊の激闘に思いを馳せねばならない。貸切りバスが予定より早く着いたので、小さな山城をゆっくりと巡ることが出来た。低山にはめずらしい粉雪を踏み、山頂に至る尾根筋を登る。要所々には、これはと思わせる見張り所があり、眺望は満点、眼下には京丹街道が目目の当たりにある。「ここに携帯電話があったら戦術は意のままになるぞ！」N君の奇抜な発想が出た。山頂で一休みのあと、ここが光秀が母の処刑の松、ここがあゝの重装備の騎馬武者が駆け抜けた尾根と、悲劇の落城を辿る。やっぱり「よき時代に生まれて来てよかった」と己が安泰を悟るのだが、一度はあの頃の熱気に我が身を焦がせたい、そう思わぬこともない。人とは不思議な生き物よと思うのである。午後から篠山城に向かう。八上城落城のあと、慶長14年(1609年)徳川家康の命でわずか1年の突貫工事にもかかわらず、天下普請で築かれた堅牢な城壁である。でもなぜか情感が湧いてこない。江戸期250年間無事安寧のまま廃城を迎えた城と、食欲調整や時間待ちに訪れた我々たちが妙にマッチングしたのだろうか、否そうではない。「国敗れて山河あり、城春にして草木青みたり」と、城跡はやはり悲劇の落城にこそ似合うのかもしれない。篠山市内から少し入った山あい、日本一の猪と称する[奥栄]がある。裏山に猪牧場があるが、食べる前に見るのは禁物である。空腹を食膳に乗せた故か、それとも本当に旨かったのか、皆さん和気藹々のうちに大満足のようである。外に出れば八上の里に夕暮れが迫っていた。「丹ンバ〜篠ヤマ〜ア山家の猿が〜ヨイヨイ」そのむかし大声を張り上げて歌っていたデカンショ節だが、実は“山家の猿”は“八上の猿”ではなかったのか? 「丹ンバ〜篠ヤマ〜ア八上の猿がヨイヨイ 華のお江戸デ〜エ相撲オ取る ヨ〜オイヨ〜オイデッカシヨ」が正調かもしれない。篠山藩主の青山某君が、華のお江戸に八上の力士を引き連れて行ったという伝承にこれで合うだろう。今日もまた思わぬ収穫を得た。 記:紀伊壱本(節)</p>			
<p>連番</p>	<p>318 例会No. OP126</p>	<p>内容 比良・蓬萊山から小女郎峠</p>	<p>実施年月日 2010/2/14</p>	<p>担当者 本郷、大西(征)</p>
<p>参加者</p>	<p>本郷善之助、大西征四郎、奥中種雄、宮平良雄、安部泰子、柴田弘子、小椋美佐、長瀬茂正、谷村洋子、安本嘉代、近藤さとみ、保木道代、寺島直子、板谷佳史、川守田康行、笠松マサエ、仙谷経一郎、岸田暎子</p>			<p>参加者数 18</p>
<p>担当者コメント</p>	<p>湖西線の車窓より見上げる比良連峰は前夜来の降雪で山頂付近は白く輝いている。林道終点近くより積雪が見られ、金ピラ峠付近は30センチ以上の積雪、やはり冬山は雪がないと始まらない。動物の足跡だけの新雪を踏んで歩く気分良さ、樹氷が青空にはえる晴天とあいまって最高。山頂のゲレンデはボーダーやスキーヤーでにぎわっている。眼下の湖面はにぶく光って美しい。小女郎峠に向かって下って行くと雪が融けた水滴が枝に再び凍り付いて逆光にキラキラと光って美しい。あとはのんびりと湖面をながめながら少し疲れたが、気分良く歩くだけ。更に下ると対岸の霊仙山や伊吹山が白く霞んでいる。あとはゆっくりと蓬萊駅へと歩を進め、7時間の歩みを終えました。 記:本郷</p>			
<p>連番</p>	<p>319 例会No. 一般186</p>	<p>内容 滝畑・権現山</p>	<p>実施年月日 2010/2/21</p>	<p>担当者 板谷、翁長</p>
<p>参加者</p>	<p>板谷佳史、翁長和幸、田中智子、神阪洋子、寄川都美子、松本明恵、岸本久仁雄、紀伊壱本節雄、紀伊壱本博美、西村美幸、磯辺秀雄、山本洋、吉田伸寛、加福輝之、仙谷経一郎、奥中種雄、堀木宣夫、秋田文雄、大西征四郎、安本昭久、安本嘉代、小椋美佐、寺島直子、安岡和子</p>			<p>参加者数 24</p>
<p>担当者コメント</p>	<p>昭文社の登山地図に、「権現城跡」「サルの前栽」等と記されているが登山道の記入は無い。横谷の車道から見上げると、稜線直下に岩壁があるようだし、派生している尾根には岩場が点在しているの見える。前からどうにも気になる山域であったので3回ほど通って探ってみたことがある。気に入りの展望場所も見つかったので、ぜひEPEの例会に取り上げようと思い、計画しました。滝にまつわる秘話も城跡というのも確たる歴史上の事実かどうか? 言い伝えに過ぎないと片付ける向きもあるようですが、紀伊壱本代表のロマンあふれる説に耳を傾けていると、ダムなど無かった昔の滝畑を思い浮かべる気になさるような、都会近くとは思えない、天空に孤立して世俗と隔絶した場所であると思います。 記:板谷</p>			
<p>連番</p>	<p>320 例会No. OP127</p>	<p>内容 台高・白鬚岳</p>	<p>実施年月日 2010/2/28</p>	<p>担当者 本郷、三原</p>
<p>参加者</p>	<p>本郷善之助、三原秀元、板谷佳史、大西征四郎、小椋美佐、安部泰子、柴田弘子、奥中種雄、黒澤百合子、近藤さとみ、保木道代、安本嘉代、谷村洋子、田中智子、川守田康行、長瀬茂正、翁長和幸、安岡和子</p>			<p>参加者数 18</p>
<p>担当者コメント</p>	<p>吉野川の上流、北股川と中奥川とに挟まれてそびえる白鬚岳、小白鬚から続く急峻な尾根は、岩稜が混じり、登り応えのある立派な山で「台高山脈の前衛峰では最も雄大な山容を持っている」と紹介されている通りの山でした。ここ数日来的気温上昇と降雨のため積雪は無く、冬山にしては少し残念でした。当日は昨夜来の雨でしたが、歩き始める頃よりどうにか止んで標高1,000mを越えようと枝に着いた水滴が凍り着き、強風で落下する。登路は落ちた氷で真っ白、昨年4月のオプション例会113回・氷ノ山の山行を思わせる状態。山頂付近は霧氷で美しいが、ガスの為、終日展望無し。18名の参加者がおり、時間的に少し心配しましたがオプション例会参加者の皆さん、足が揃って予定通り7時間で出発地へ帰着しました。日帰り山行としては、久しぶりで骨のある例会でした。 記:本郷</p>			
<p>連番</p>	<p>321 例会No. 一般187</p>	<p>内容 京都・天文字山</p>	<p>実施年月日 2010/3/6</p>	<p>担当者 秋田、奥中</p>
<p>参加者</p>	<p>秋田文雄、奥中種雄、寄川都美子、仙谷経一郎、堀木宣夫、柴田弘子、田中智子、江本恭子</p>			<p>参加者数 8</p>
<p>担当者コメント</p>	<p>今日一日は雨のつもりで蹴上駅を出発する。南禅寺方面から登る予定で、疎水下のレトロなトンネルを通り抜けると、京都らしい静かな雰囲気、雨に映えた梅の花が、今日の山行を心安らかに迎えてくれた。南禅寺三門より苔の美しい道を煉瓦造りの水道橋(水路閣)をくぐり大文字山への山道へ入る。雨で悪路を山頂へ向かう。一部赤松の木が雨のせいかわかぬ深みのある朱色で、このような色は私は初めて見ました。京都一周トレイルコース・七福思案処を通過し、黙々と長く感じつつ山頂へ。山頂はガスで視界が悪く、雨も止む気配も無く早々に大文字火床に到着。昼食中の一瞬のガスの切れ間から京都市街の一部が墨絵ばかしのようで、まるで天空の雲上人になった気分、雨の中心いやされるよい気持ちになりました。これより法然院を経て哲学の道へ。雨のせいかわかぬ人も少なく、哲学者・西幾太郎が思案に耽った雰囲気ですが、我々面々は思索とか哲学などは程遠いメンバーで早々に吉田山へ。最終は吉田山から東山と大文字山を正面から眺め、一日の反省と雨でないといわからない自然の景色に感動し、雨に感謝して、楽しい例会の幕を閉じました。 記:秋田</p>			

2010年度(09/11~10/10)EPEクラブ活動報告

2010/10/E現在 板谷

連番	322	例会No.	OP128	内容	スキーカーニバル イン 北海道・キロロ	実施年月日	2010/3/9~13	担当者	紀伊壱本、西村	参加者数	10
参加者	紀伊壱本節雄、西村晶、本郷善之助、内杉安繁、上原進一、笠松マサエ、山田春雄、達健一、西村美幸、紀伊壱本博美										
担当者コメント	<p>スキーカーニバルは第8回を迎えた。そのうち北海道は6度目、キロロは残り少なくなったなかでの大物スキー場である。パブル絶頂期にヤマハによって開発されたリゾートスキー場で、ホテルピアノの名前などはその名残だろう。例によって3年程前に身売りされている。いずこも同じ秋の空ということだが、いま真面目に働いてきた我々が手軽にその恩恵を被るのは有難い事である。天気運にも恵まれた。全国的にみると強い低気圧が太平洋側を通過し、北海道の東で猛烈に発達したようだが、キロロでは強風に煽られながらも何とか楽しむ事ができた。余市岳(1488m)はゴンドラ終点から指呼の間に見える。K嬢の話では山頂までシール登行で2時間ほどらしい。この程度の山スキーなら今からでも復帰できそうな気がする。慾というものだろうか、甘いと言われようか。二日目の午後、血迷った訳ではないがスキーレッスンを受ける事になった。勿論はじめての体験である。受講生として私の年齢は一切話題にならなかったのも、多分、私の様な高齢の受講生も結構多いのだろ。翌日にはN君も受けたので(勿論初体験)、その後あれこれ皆さんと一緒に実証しながら、結論からして非常にいい勉強になった。もっと早く(このシリーズの始めから)受講すべきだったと残念に思うが、それを言うなら、この先も積極的に受講すべきだろう。フリースタイル?と云えば格好はいいが、感覚や概念だけで長らくやってきた我流スキー、勝手気儘にきたものだとしみじみ反省した。続いて三日目、今度は厚かましくも上級者向き最新モデルスキーに挑戦した。一台10数万はするのをN君と二台借り出して履いてみた。片手で持ち上がらない程ずしりと重い。始めはその重さに戸惑ったが、慣れるに従いなるほどこれがカービングのシャープな切れ味か、と実感した。道具はよりよい進歩の為に創られる。用具と技術は互いに絡み合い鑄を削って成長する。こんな当り前のことを殊更に吹聴し感嘆している自分達は、なんだ、まるで青二才ではないか。四日目の最終リフト終了のチャイムを聞きながら、全員一同に会した。今回はまことに実りある日々でした。「ご苦労様でした」と健闘を讃えあった。今シリーズは掛値なしに全員が長足の進歩を遂げた。この歳で進歩するなどと言う、喜びを口に出せることは素晴らしい。「おい、20歳は若返ったぞ!」肩を叩き合って高笑した。「老いて学べば涸れること無し」これからですよ、EPEの皆さん。毎回いうことで恐縮ですが、山というフィールドを一生の友とした限り、雪山は無論のことスキーの楽しさを存分に味わいましょう。これが参加者からの熱いメッセージです。記:紀伊壱本(節)</p>										
連番	323	例会No.	一般188	内容	伊勢・堀坂山から観音岳	実施年月日	2010/3/14	担当者	三原、板谷	参加者数	12
参加者	三原秀元、板谷佳史、堀木宣夫、西田保、岩本和行、近藤さとみ、寄川都美子、寺島直子、奥中種雄、小椋美佐、安岡和子、黒澤百合子										
担当者コメント	<p>寒い雨が続きの休日からやっと開放され、春めいてきた一日を伊勢の名山堀坂山と観音岳に向かって新名神と伊勢自動車道を通り、松坂ICで下りる。登山口の森林公園までは僅か3km余りなので意外と早く着くことができた。堀坂山は伊勢三山(局ヶ岳、白猪山、堀坂山)の一つで信仰の山として地元では良く登られている山です。始めのしばらくはきつい登りの林道を行く。登山口を示す道標があり、急な尾根道を登って行くことと稜線にでる。二つほどコブを越してゆくと雌岳の頂上である。もうひと頑張りで本当の頂上に到着する。多少の春霞はあるものの360度の大展望である。御岳、八ヶ岳、南アルプスと雪のかぶった山々が遠望できる。よく見ると富士山の頭もかすかに確かに見えている。昼食後未だゆっくりとしたい気持ちだが、次の山観音岳が待っているので出発とする。頂上の堀坂大権現の石標や下山途中には大日如来坐像が二箇所にも安置され、どちらも青銅製の立派な物である。堀坂峠で県道を横切り観音岳を目指す。観音岳の頂上は祠か何かあるかなと思ったが、三角点があるのみの静かな頂上だ。しかし展望は堀坂山に劣らぬくらい立派なもので、伊勢湾や知多半島さえも見ることが出来る。今日の晴天に感謝しながら出発地の森林公園に下山する。今日一日を楽しませてくれた山々を背に帰阪の途につくが、高速で大渋滞にひっかかり10kmほどを3時間半という異常な体験もさせられた一日でした。皆さん本当にお疲れ様でした。記:三原</p>										
連番	324	例会No.	OP129	内容	白山山系・三方崩山	実施年月日	2010/3/20~21	担当者	板谷、安部	参加者数	8
参加者	板谷佳史、安部泰子、本郷善之助、川守田康行、保木道代、宮平良雄、西村晶、有永寛										
担当者コメント	<p>もったいないような小春日和の朝、気象情報によると午後から悪天覚悟での大阪出発となる。いつも心配な高速道路の渋滞もたいしたことはなく、予定通りの時刻に平瀬から歩き始める。天候悪化はまだ先のように青空だ。国道わきからすぐ雪道ですっかり埋まって区別のつきにくい林道を1時間ほどで、見覚えのある林道終点の登山道が始まる地点に着く。さすが泉州山岳会の現役で活躍中の西村、有永さんだ、トップを任せると、力強いピッチで一直線にルートである枝尾根上に向かって行く。そこから先、夏道はジグザグを繰り返して高度を上げるが、両人はお構いなしにひたすら尾根をダイレクトに辿る。パワーとルートの読みが無いと出来ないことだ、後ろから見ていて感心する人、多数。予定の1240m附近で格好の場所にテントを設営できた。夜中何時頃か目を覚ますと雷混じりの強風雨となっていた、前線通過中で気象情報どおり当たり前と思いつつ4時までまた寝る。この天候では上には行けない、朝も同じ状況ならここから下山するしかない。しかし起床する頃には小止みになってきたので、希望を感じつつ予定通り5:30出発に向け朝食。嬉しいことに出発時には完全に止む、これではアタクしない訳にはいかない。擬似好天はわずかの間で案の定、冬型の天候になって荒れてきたが、雨ではなく雪なので続行することにする。総勢8名と当初より参加者が減ったことも有利にはたらいてスピーディに頂上を往復できた。ホワイトアウトで視界数メートルの頂上だったが、EPEの雪山として、荒島岳、経ガ岳と段階を踏んでの今回の山行だったこともあり久しぶりに達成感、満足感に浸りました。記:板谷</p>										
連番	325	例会No.	一般189	内容	丹波・白髪岳	実施年月日	2010/3/28	担当者	大西(征)、大西(恒)	参加者数	12
参加者	大西征四郎、大西恒雄、小椋美佐、江本恭子、杉本栄子、田中智子、寺島直子、奥中種雄、仙谷経一郎、寄川都美子、加福輝之、安本嘉代										

2010年度(09/11~10/10)EPEクラブ活動報告

2010/10/E現在 板谷

<p>担当者コメント</p>	<p>「丹波富士」とも呼ばれている 白髪岳と松尾山の住山ルートは「ふるさと 兵庫50山」の案内標識を見て白髪岳に向かう。途中辻の立石(1817年建立)、寒緋桜、茅草の家に見取られながら、登山口に着く。「住山生活環境保全」の案内板を見る、此处まで至る所に「ポイ捨て禁止」等の注意札が目につく、これに逆らう登山者が多いのか、残念である。白髪岳登頂口から杉林の中を登る、急登では所々に丸太の階段があり歩きやすい。南尾根に出ると展望も開けてくる。フィックスロープ、鎖を支えにして露岩を越え白髪岳山頂に着く。最初にして最後の1パーティに出会う、その方々も松尾山に下り頂上は我々12名の独占場となる。360度展望が利くが多紀連山、播州の山並み等の遠望は良くない。各々岩場で昼食を摂る、心地良い微風も次第に冷たく感じる。白髪岳頂上から松尾山に向かう、2重、3重のフィックスロープが左右に張ってある急坂を下る。68.9mの峰を巻かず直登したが一箇所のみ展望が利くだけであった。緩やかな尾根筋を朽ち葉を踏みしめ登ると松尾山頂上に到着、酒井城跡らしく広いが雑木林に囲まれ展望は良くない、その上天候が良くない。巨木の千年杉を傘を外し見上げる、卵塔群から左に大きく曲がり高仙寺本堂跡に出会う。足場の悪い踏み跡を辿り不動の滝を目指す、が不動滝付近は倒木で滝壺に近寄りづらい、更に雨脚が強くなりJR古市駅に急ぐが駅に近づくにつれ小雨になる。今回三つのピークを越えたがそれ以上の坂を上り下った様な感じがする。天候が良く歴史を知れば尚良い山行と成る事然りである。 記:大西(征)</p>		
<p>連番</p>	<p>326 例会No.一般190 内容 紀泉ア・俎石山、大福山から雲山峰 実施年月日 2010/4/4</p>	<p>担当者 翁長、大西(恒)</p>	
<p>参加者</p>	<p>翁長和幸、大西恒雄、山本洋、吉田伸寛、紀伊壱本節雄、紀伊壱本博美、仙谷経一郎、大西征四郎、笠松マサエ、和田敬子、杉本栄子、近藤さとみ、本郷善之助、寺島直子、神阪洋子、板谷佳史、奥中種雄、安本昭久、安本嘉代、田中智子、小椋美佐、黒澤百合子</p>	<p>参加者数 22</p>	
<p>担当者コメント</p>	<p>初めての例会主担当者として郷土の山で歴史を感じるところを選びました。葛城山は役の行者の出生地である事から、峰々には葛城修験道の経塚や行場が多くあります。今回のコースにも第三経塚といわれている大福山や雲山峰があり、なにやら修験道に関係ありそうな山名の籤法ガ岳もあります。余談であります、最近犬鳴山(葛城28宿根本道場)に行つて驚きました。子供の頃には何も無かったところに大きな幟、石仏や立派な建物が出来ていて、戦後の信仰の自由による葛城修験道の復活を強く感じた事です。この原稿を書く前日にも山伏姿の一行を駅のターミナルで見かけ、ますますこの思いを強くしました。また下山は熊野街道、紀州街道、小栗判官とてゐる姫の小栗街道と、いくつかの名前を持つ街道筋の宿場町であった山中溪に決めコース設定をしました。総勢22名で快晴の中、サンヒル都横の車止めから出発。いつもながら元気な中高年の仲間たち。ワイワイ、ガヤガヤと歩き出す。正規のコースをショートカットして鳥取池からのコースに合流。俎石山へとむかう。頂上手前の展望台からは阪南スカイタウン、関空、大阪湾が一望でき、またもワイワイ、ガヤガヤ賑やかなことだ。俎石山とは変わった山名であるが、いわれは良く知らない。この地域は泉州砂岩という良質な石の産地であったので、俎のような大石が頂上にあつたのかもしれない・・・?「弁財天窟」の道標を過ぎ第三経塚の山といわれている大福山に到着。ランチタイムとする。地味な山と思うのだが団体のハイカーで頂上にはぎわっている。何故こんなに人気があるのか、私たちもその一団なのだが。籤法ガ岳から井関峠へ。井関峠には吾妻やが出来ており、すぐ横の桜の老木は満開の花をつけていた。峠の南側には小さな祠があり、修験者が勧行をした時に残す木札が数枚あつた。天気が良く暑いぐらいの山道を雲山峰へ向う。ここにも第三経塚があると言われていたが、第三経塚は大福山という説が有力らしい。何の変わつもない山道を山中溪へむかう。満開の桜見物でにぎわうJR山中溪駅に16時20分着。 記:翁長</p>		
<p>連番</p>	<p>327 例会No.一般191 内容 葛城28宿・亀瀬岩～信貴山 実施年月日 2010/4/11</p>	<p>担当者 板谷、翁長</p>	
<p>参加者</p>	<p>板谷佳史、翁長和幸、田中智子、安本嘉代、堀木宣夫、山本洋、松本明恵、吉田伸寛、寄川都美子、黒澤百合子、仙谷経一郎、奥中種雄、岩本和行、谷孝司、三原秀元、寺島直子、近藤さとみ、笠松マサエ、江本恭子</p>	<p>参加者数 19</p>	
<p>担当者コメント</p>	<p>先週に引き続き、桜が満喫できる例会となりました。出発地の亀瀬岩は葛城28宿奥駈け修行結願・満願の聖なる社として地滑り工事のため峠集落の住民のほとんどが移転した今、ボランティアの方々が保存に努められています。EPEの例会でも友が島にある第一経塚を始め、機会のあるごとにいくつかの地を訪ねています。そんな感慨に耽りながら信貴山への長い車道をひたすら歩く。信貴山境内は花見を兼ねた参拝客で大賑わいだが、山頂を目指す人は少なく静かな昼食ができた。更に生駒への縦走路をひたすら歩く、途中満開の桜はもちろんだがミツバツツジ、ツバキ、コブシ、モクレンと花々に次々と出会え、飽きさせない。7時間超に及ぶ長い山行、しかも半分は車道歩きという内容でしたが、花に慰められての充実した一日でした。 記:板谷</p>		
<p>連番</p>	<p>328 例会No. OP130 内容 四国・石鎚山～堂ヶ森 実施年月日 2020/4/17～19</p>	<p>担当者 紀伊壱本、西村</p>	
<p>参加者</p>	<p>紀伊壱本節雄、西村晶、西村美幸、紀伊壱本博美</p>	<p>参加者数 4</p>	
<p>出発日を前日にスライドしたので、お陰様で今回も快晴に恵まれた。成就の宿を5時に出発する。泊り客は他に無く、実に爽やかな朝である。石鎚山は初見参であるが、大峰山と同じ修験道の山だけに雰囲気はよく似ているようだ。2時間ほどかけて二ノ鎖まで登る。数日前に降ったという季節外れの雪のせいか、ここから見る天狗岳の北壁はなかなかの迫力である。さてこのまま直進すれば山頂まで一投足だが、ここから再度、北壁の基部を縫う様にして土小屋への道を下る。つまりは東稜の分岐点で振り出しに戻るわけだ。今回の例会予告は、成就から石鎚山～二ノ森～堂ヶ森の縦走がメインであったが、フタを開けてみるとどうした訳か担当者夫婦二組の4人パーティである。さらに言うなら、今年定年を迎えたN君と私は40年前の新人とリーダー、気心は互いに知れている。それではと、内容の変更を申請して天狗岳東稜を経由して縦走をすることにした。実は東稜はひそかに行つてみたかったルートである。だが基本的には予告ルートは尊重しなければならない。これはいわば楽しい回り道である。子供の頃から回り道は大好きである。石鎚山頂は西から弥山、天狗岳、南尖峰といずれも際立った岩峰が並んでいる。東稜はその南尖峰の東に連なる急峻な稜である。一般ルートではないので誰彼なく勧めることは出来ないが、分岐点から徐々にせり上がって行く高度感はスッキリとした気分が味わえる。N君はひそかにザイルを持参してくれていたが、出すほどのこともなく快適に登ってしまった。とくに南尖峰に飛び出すところは抜群の高度感と、岩も堅くて爽快である。二ノ鎖から下りはじめて3時間あまり、この道草には大満足である(このあと続く長い苦行も知らずして、だが)。東稜では誰も会わなかったし、弥山の山頂にも人影はまばらである。こんな日と時間をうまく引き出す事に長けてきたようだ。南尖峰の上でゆっくり昼食とした。11時過ぎて予定通り石鎚山を後にした。</p>			

2010年度(09/11～10/10)EPEクラブ活動報告

2010/10/E現在 板谷

担当者コメント これより西に向けて縦走に入る。山並みは一転して牧草地のようなソフトな、短い笹の密集した尾根筋である。二ノ森はほんの間近に見えていたので、この先は楽勝かと思えた。ところが実際は遅々として進まず、2時間も経てやっと到着した二ノ森は何と堂々たる一等三角点である。しかも石鎚山と対峙する標高1929mの立派な風格である。二ノ森という名前に騙されたのかも知れない。それにしてもこの眺望はまるで空中に浮ぶ大展望台である。うれしい誤算であった。四国の山々がこんなに素晴らしいとは失礼ながら知らなかった事である。裏から見る石鎚山の魅力も素晴らしい。ぜひここから雪の石鎚山を眺めてみたいものだ、またひとつ夢が増えてしまった。縦走の最後のピークとなる堂ガ森まで、さらに次々と牧草地の様な笹山が続いている。またしても錯覚に陥るようだ。ほんの四、五百米の低山を闊歩しているかの気分だが、現実には午後2時半を過ぎて到着した堂ガ森は標高1689mである。下山口は標高550mであるから、ここから高差1100mの一気に下り待っている。それでもまだ誰もが、現実には優雅な気分には浸っていた。ようやく笹山から離れ、廃道に近い藪の急斜面を下り始めてやっと現実に戻った。あと500あと300あと200と、前日にN君が待置してくれた車にたどり着くと、もはや精魂尽き果てる寸前である。時刻は午後5時少し前であった。本日の実働は12時間である。「充実した一日やったね！」たがいに負け惜しみを言う。N君のよいところは即座に同調してくれるところだ。よき後輩である。あとは一路松山へ、道後温泉本館坊ちゃん風呂が待っている。コースタイム 4/18 成就5:00～二ノ鎖7:00～東稜分岐点8:00～南尖峰10:00～弥山11:00～二ノ森13:00～堂ガ森14:30～保井野登山口17:00(休み時間込み) 記:紀伊榎本(節)

連番	329	例会No.	一般192	内容	京都北山・魚谷山	実施年月日	2010/4/18	担当者	大西(征)、奥中
参加者	大西征四郎、奥中種雄、本郷善之助、板谷佳史、堀木宣夫、安本昭久、仙谷経一郎、翁長和幸、松本明恵、神阪洋子、柴田弘子、安本嘉代、宮平良雄、田中智子							参加者数	14
担当者コメント	出町柳駅からタクシーの車内「中津川の出合橋バス停まで」とお願いしたが雲ヶ畑方面と言えれば理解出来たのと言、プロなのにも思ったが、帰りに4台依頼したら営業所が賀茂川沿いにある別のタクシー会社を紹介してくれた、優しい運転手に出会った。バス停から舗装された林道に行く。桜はまだ見頃、両側には枝打ちされた杉林が続く丁度良い時間の松尾谷分岐で小休止。直谷に入って行く、貴船山を源流とする樋ノ水谷を右に見て通過し、壊れた小屋らしきを見る作業小屋でもないこれが直谷山荘か、しばらく行くと校倉造りの山小屋麗杉荘(れいざんそう)に着く、1935年建造で老朽化が進み年月を感じる。滝谷峠と柳谷峠の分岐点で丸木橋を恐る恐る渡り山道に入る、「北山の小舎」発祥の地の掲示板を見る1927年西堀栄三郎氏らがこの地に山小舎を建設、1942年老朽のため解体、「雪山賛歌」に歌われている「煙い小舎」とはこの小舎との事、今回も教えていただく事数多く有り。例会案内概要「北山山城では北山らしい静かな山です。こよなく愛された山です。」の今西錦司博士のレリーフに会い、谷沿いの道に行く、登るにしたがって道は荒れてくるが新緑にはまだ早く裸の雑木林で見通しは良い、急登後に柳谷峠に着く雑木林の広場で昼食、晴天で気持ち良い風で幸せを感じる。 記:大西(征)								

連番	330	例会No.	一般193	内容	ベーシック登山No. 1・妙見山	実施年月日	2010/4/24	担当者	秋田、紀伊榎本
参加者	秋田文雄、紀伊榎本節雄、高木恵美子、岡本佳久、三浦清江、松本明恵、上原進一、和田都子、紀伊榎本博美、牧田柳子、渡辺三恵、野口秀也、安部泰子、津川洋子、仙谷経一郎、中田千世子、實操綾子、和田敬子、川下淳子、三原知未、三原博子、辻角ますみ							参加者数	22
担当者コメント	ベーシック例会の担当にあたり、山行の場所や内容よりも 1)山仲間と楽しく歩ける山行。 2)各自体力荒上と体の調整。 3)メンバー相互のコミュニケーション。 この3点を主体に企画しました。暗中模索のうちで参加者があるのか不安でしたが、当日集合場所に行くと、思ったよりも多くの参加者がありびっくりしました。妙見口駅10:00出発、国道を渡り民家の脇を抜けた所で始めての人もいるので、自己紹介して、雑木林の中をゆっくり登山を開始しました。八丁茶屋跡を過ぎ、しばらく登ると右側に箕面方面、高槻方面を見渡せる場所を通り静かなヒノキの道を登ると山上妙見宮では桜の花が我々を向かえてくれました。とりえず三角点に至り、ここで昼食をとりながら紀伊榎本代表よりベーシック例会の趣旨を説明してもらいました。午後より妙見の宮を一周散歩して、ユニークな「星嶺」の塔など見学しました。ここより六甲山方面が良く見渡せました。下山路は新滝道を下ることにしました。滝のイオンを一杯あびて妙見口駅に15:00着き解散しました。今回感じたことは、例会に参加したいが色々と不安があり、参加すると迷惑がかからないかと迷っておられる方が多いようでしたが、一緒に参考してみると元気で十分参加できると思えました。今の一般例会のメンバーもE.P.E.クラブ発足のころは同じようなもので続けることにより体力、気力、能力が向上してきたものと思います。E.P.E.クラブの基本的な考え方がベーシック例会の原点です。これからE.P.E.クラブの新しい原動力となられるよう、頑張ってください。 記:秋田								

連番	331	例会No.	OP131	内容	大峰・稲村ヶ岳～バリゴヤの頭	実施年月日	2010/4/24～25	担当者	本郷、三原
----	-----	-------	-------	----	----------------	-------	--------------	-----	-------

2010年度(09/11~10/10)EPEクラブ活動報告

2010/10/E現在 板谷

参加者	本郷善之助、三原秀元、柴田弘子、近藤さとみ、小椋美佐、保木道代、黒澤百合子、田中智子、神阪洋子、安本嘉代、奥中種雄、板谷佳史、安岡和子			参加者数	13				
担当者コメント	<p>洞川キャンプ場でバンガロー二棟借り上げ設備が整った炊事棟を使用、春の定番山菜の天ぷら料理を皆さんで頂く。今回テント使用でなく、バンガローの借用は早朝出発のため。お陰で5時前にキャンプ場を出発し、登山口へ移動できました。通い慣れた登山道を法力峠を経て山上辻へ、稲村ヶ岳の東面には残雪も見られ大きなツララが残っていた。稲村ヶ岳山頂より南西に向かって急な小尾根を下り、南へ進むと昔なつかしい天理大学ワンゲルの道標板が二箇所残っていた。ドンブリ辻を経てさらにヤセ尾根を、南へ向う、振り返ると一段と高く稲村ヶ岳、左に大日山の岩峰西面に、霧氷が白く光っている。踏み跡薄く標布を見失わぬように進む。幾つかのコブを越えやっつとバリゴヤの頭に登り着く。展望はあまり良くないが、南正面に弥山、八経ガ岳が堂々とした山容を見せ、東には行者還岳から七曜岳、大普賢岳と続く奥駈けの山々が続く。「久しぶりでヤブを漕いでみませんか」のキャッチフレーズ通り少しのヤブとジャクナゲの密集を漕いで正にオプション例会そのものの山行となりました。稲村ヶ岳とバリゴヤの頭は水平距離2km程ですが、小さいピークが幾つもあり登行にかなり時間を要しました。稲村ヶ岳の頂上まで帰ってやっつと登山口への下山の時刻を予想することが出来ました。早朝に母公堂出発AM5時~下山PM5時、正味12時間の実働でした。EPE例会今回は大いにパワフルが発揮されました、参加者の皆さんほんとうにお疲れ様でした。 記:本郷</p>								
連番	332	例会No.	一般194	内容	金剛山系・東條山から鳥地獄	実施年月日	2010/5/9	担当者	翁長、大西(恒)
参加者	翁長和幸、大西恒雄、岸本久仁雄、奥中種雄、西村晶、西村千秋、大西征四郎、三原秀元、西田保、堀木宣夫、齋藤容子、吉田伸寛、近藤さとみ、保木道代、寄川都美子、山下登志子、寺島直子、神阪洋子、仙谷経一郎、安本嘉代、安本昭久、山本洋			参加者数	22				
担当者コメント	<p>当初予定の赤滝谷道は廃道になっており、ひとつ東側の林道五條線を登ることにした。林道五條線の途中から東條山を往復し千早峠に出る。神福山の葛城第19経塚の小広場でランチタイムとなる。ここはダイヤモンド・トレイルから少し外れているので、いつも静かな所になっている。杉尾峠から鳥地獄に向かう。鳥地獄とは赤茶けた炭酸冷水の小さな水溜りのようなもの。炭酸ガスと思われるものが水際からブクブクと泡立っている。熱ければ温泉と云うのかも？今日は小鳥の倒れているのは見かけなかった。今回は金剛山周辺でも、あまりハイカーが歩かないコースを設定しました。ダイヤモンド・トレイル以外では鳥地獄で3人パーティに出会っただけで、天候の良い休日を静かなハイキングで楽しみました。 記:翁長</p>								
連番	333	例会No.	OP132	内容	瑞牆山と金峰山	実施年月日	2010/5/8~10	担当者	紀伊壱本、本郷
参加者	紀伊壱本節雄、本郷善之助、柴田弘子、田中智子、小椋美佐、紀伊壱本博美			参加者数	6				
担当者コメント	<p>5/8日 新大阪8時40分発、静岡、甲府、韮崎を経て山梨県北杜市の瑞牆山荘前バス停に午後3時過ぎに到着した。奥秩父も、このたび初見参である。関西人にとって馴染みにくい地域である。むしろ、東北や北海道に出向く方が抵抗はないが、見知らぬ地域だからこそ、今の私たちにとっては新鮮な魅力なのである。瑞牆山を選んだもう一つの理由は、怪奇な岩峰群に魅せられたからだ。たしかに壯観である。カラマツの高い梢を透してみる岩峰群は、関西の山にはない風景である。ワクワクした気持ちを抑えながら、本日の予定、富士見平の小屋に至る。5/9日 6時出発、快晴である。8時には既に主稜線の上の大日岩を通過したので、あるいは今日中に金峰と瑞牆の両峰とも片付けられるかと、ちょっぴり欲をかいてみた。天気予報では明日は下り坂というのだし。だが、登るにつれて意外にピッチははかどらない。私の体調のせいもあるが、樹林帯に隠された残雪が見事に氷化している。そのうえ傾斜も結構強いので、登りはツボ足でOKかと思いきや、舐めたものではない。10時には山頂への予定が11時半になり、2時帰着の予定が4時半になった。少々の手応えはむしろ望むところだが、直前まで予測できなかったアルバイトに少し反省した。もしアイゼンを持参しなければ、引き返す事になっただろう。快晴だというのに、奥秩父随一の眺望を見過ごす事になれば大失態である。今日はこれで良しとせねばなるまい。話は戻るが、この日、日曜日だというに人影はまばらである。ところが僅かに行き交う登山者に若者が多い。しかも山ボーイ、山ガールとも洒落た服装が身に付いている。「関東はちやうな！」我が女性方は口々に言う。ひと頃の、百名山を遮二無二目指す高齢者も影が薄い。なんだか舞台がぐるりと回り始めたような、そんな予感を覚える。若者が増える事は頼もしくて良い事である。もし関東が先んじているなら、やがて関西にも若者が増え来るだろう。だがそれはそれ、我が女性方の目は、時代の先端をいく山ファッションに、多大な興味を示されたようである。</p> <p>5/10日 5時出発、嬉しいことに今日も快晴である。富士見平から山腹を捲くように行くと、やがて天鳥川を隔てて瑞牆山と対峙する。これは岩峰群というよりニョキ、ニョキ突出した巨大な岩塔群と言うのが相応しい。「凄いなあ！」女性方からいっせいに感嘆の声が出る。でもどこからどうあの岩頭に出るのか、そんな詮索はいっこうに無い。聞けば、路があるから心配しないとの答え、なるほど明解である。天鳥川の源流を渡ると、あとは二つの岩塔の狭間をひたすら登る。真近に迫る岩壁はさすが見応えがある。全体傾斜はかなり強いが、登路そのものは木梯子やロープが適所配置され安全である。また南向きなので昨日のような残雪は無い。最後の岩塔は、その肩からいったん北側に回り込み、樹林の中をあっけなく岩頭に出た、そこが瑞牆山の山頂である。三角点こそ無いが、展望は実に素晴らしい。時刻はまだ午前7時過ぎ、朝空に輝く真っ白な富士山、南アルプス、中央アルプス、八ヶ岳連峰、遠く北の端には薄く噴煙が昇る浅間山、さらに北アルプスの一部まで飽く事のない眺めである。そして、甲斐の山々に取り巻かれた甲府盆地を見下ろすと、そこにまた新たな想いが沸いてくる。やって来てよかった、しみじみこの感動を忘れてはならないと思うのである。瑞牆山荘前のバス停までゆっくり11時に下山した。これで例会予定はすべて順調に終了したので、あとは一日5便あるバスの時間差を利用して、ラジウム含有量世界一という増富温泉に立寄ることが出来た。体温に近い35度の源泉かけ流しに首まで浸ると、湯上りはホカホカ快適である。確かに下山後の温泉効果は抜群だ、不思議と筋肉痛を感じ無い。前回の道後温泉もそうであった。その前もそうだ、やっぱり来るものが来たかと思うのである。さてそれは、E.P.E. 究極の企て「秘境 温泉シリーズ」とでも名付けましょうか、もう誰に憚ることはないのである。 記:紀伊壱本(節)</p>								
連番	334	例会No.	一般195	内容	住塚山と国見山	実施年月日	2010/5/16	担当者	大西(征)、柴田
参加者	大西征四郎、柴田弘子、秋田文雄、安岡和子、保木道代、寄川都美子、奥中種雄、田中智子、安本嘉代、小椋美佐			参加者数	10				

2010年度(09/11~10/10)EPEクラブ活動報告

2010/10/E現在 板谷

担当者コメント	<p>屏風岩の案内板を見てタクシーを下車する、地元の年配者に尋ね曲がりくねった舗装道路を高差約300m登ると、広く緑に囲まれた屏風岩公苑に着き休憩。「兜岳の南西に屏風のように柱状節理の巨大な岩壁が連なって、高さ200m、幅1.5kmにわたる岩の柱は絶景、桜と紅葉の頃が最高」との説明文にあるが古木の桜の新緑も捨てたものではない。住塚山への案内板からは急登の始まり「今日はのんびりとハイキングと」は消え去ったのだ。枝打ちされた杉林、垣間見える新緑の山並み、整備された階段を登り小さなコブを3つ程越えて二等三角点の住塚山に到着。国見山へは出だしから急坂に、唐松林が続く、ゼニヤタワからは急登に露岩が多く「3点支持だ」の音が響く、難しい岩ではないが岩場は特に確実性が求められる。頂上で初めて山行者に出会う静かな山行である。四方遮るものは無く、遠望眺めながらの大休憩。国見山からは朽ちているが確りした木製の階段が続く、クマタワからは東海自然歩道を歩く。14時のバスに乗る事になり早足になる。済浄坊の滝、ナメ滝に出会う、汗ばんだ体に清澄な水が恋しい。長走りノ滝を眺めながら余裕を持ってバス停に辿り着いた。榛原行きが無い名張行きのみ又も住民の方に尋ねる「目的のバス停は5、6分先です」と教えられる。更に早足になるA氏体力回復中なのに先頭を走っているマラソン実績がものを言う。橋の上に停車中のバスが見える、誰かが手を振り運転手に合図を送る。停留場で若干待ち時間があり、呼吸を整えられた。バスは途中まで我々の貸切で、途中住民が育てた裾野一面満開の石楠花を車窓から見る事が出来た。電車への乗り継ぎもスムーズで早々と大阪に到着、ハイキングから新緑の満喫、マラソンまで多彩な山行であった。 記:大西(征)</p>								
連番	335	例会No. OP133	内容 奥伊吹・虎子山と国見岳	実施年月日	2010/5/23	担当者	三原、翁長	参加者数	
参加者	荒天中止								
担当者コメント									
連番	336	例会No. 一般196	内容 丹波・鋸山	実施年月日	2010/5/30	担当者	板谷、大西(恒)	参加者数	
参加者	板谷佳史、大西恒雄、奥中種雄、大西征四郎、西田保、寺島直子、小椋美佐、神阪洋子、寄川都美子、柴田弘子、仙谷経一郎、笠松マサエ、本郷善之助、翁長和幸、有永寛、紀伊塾本節雄、紀伊塾本博美、安本昭久、安本嘉代、黒澤百合子							参加者数	20
担当者コメント	<p>市町村合併で多紀の地名は消滅してしまいましたが、「多紀アルプス」の山群名だけは残りました。西の三尾山から鋸山、西ガ嶽、三嶽、小金ガ嶽、八ヶ尾山、雨石山、櫃ヶ嶽といった峰々を連ね、丹波の盟主にふさわしい山容を誇ります。EPEクラブの例会でもいくつか登りましたが、今回は鋸山をとりあげました。地形図を読むと、鏡峠から栗柄峠まで30以上のピークがあるとか。標高は低いので高低差は少ないものの、歩き応えのあるルートです。特に鋸山頂上前後の岩混じりの山稜や景観は鋸の名にふさわしいものです。今回、担当者の勉強不足のためヒカゲツツジの花期を一月以上も過ぎており花の面影さえありませんでした。期待して参加された方には申し訳ありませんでした。来年こそはヒカゲツツジの花期を逃さないで丹波の山例会を計画致します。 記:板谷</p>								
連番	337	例会No. 一般197	内容 播磨・本龍野から城山	実施年月日	2010/6/6	担当者	紀伊塾本、柴田	参加者数	
参加者	紀伊塾本節雄、柴田弘子、大西征四郎、仙谷経一郎、青木義雄、西田保、小椋勝久、小椋美佐、高木恵美子、紀伊塾本博美、田中智子、川崎喜美子、寄川都美子、寺島直子、辻角ますみ、奥中種雄、横内まみね、笠松マサエ、津川洋子、藤田喜久江、和田都子、内杉安繁							参加者数	22
担当者コメント	<p>今日も上々の天気である。JR姫新線本竜野駅から、現存する龍野城(実は大手門一帯の白壁)の裏庭を通り抜けて旧龍野城跡の鶏籠山に登る。鬱蒼とした森の中から、いきなりの急登である。東面に揖保川を控え、文字通り鳥籠を伏せた様なこの山は、標高218mとは思えぬ手ごたえである。山頂に近付くほどに、両側が急峻になり、狭い尾根上に2段3段と人手による築城当時の削平地が現れる。そこには簡素な表示板が差し立ててあり、そのさりげない様がいかにもうれしい。この山城(旧城)は江戸期に入ったあと、赤松氏の手を離れ、山麓の現龍野城として移築されてしまうのである。そのあとおそらく手付かずのまま放置されたのであろうが、それでも二の丸、本丸への連ながりなど見事に残っており、搦手にはめずらしく堅堀の跡もある。それだけ当時は堅牢な造りであったのであろう。赤松氏最後の城主となる赤松広英(別名斎村政広)は、この山城から宿敵山名氏に取って代り、あの名城播磨竹田城の主へと躍進するのだが、のちに徳川家康の不興を買い、自刃して果てることになる。が奇しくもそれは、その後廢城となる竹田城にとっても最後の城主となった、運命の人である。 両見峠(旧龍野城搦手口)にいったん下り、的場山へはまた急登である。次いで主稜は真北に転進するが、その先に時代は前後するが、同じ赤松氏の城山城がある。しかし標高400mほどの小さな峰続きとはいえ、登下降がけっこう深く、思わぬ苦行となる。幸い眺望はすばらしい。右眼下には常に揖保川が併流し、細幅の尾根道は歩いているだけで快適な気分が満ちてくる。雑木林のなか日陰と日照が交互に現れると、そこはまさしく里山の世界である。播磨の山々もまた素晴らしいの一言だ。ハイキング+歴史探訪の冥利とはこのことである。かなりくたびれた頃、やっと城山(キノヤマ)城跡に着いた。亀山(キノヤマ)山頂(458m)の肩にある窪地が城中にあった赤松屋敷の跡である。あろうことか、そこだけが妙に異質な、昼尚暗き杉木立である。疲れと空腹で全員べったり座り込んで、2度目の昼食を摂る。今回から小椋勝久君の講話が新しく登場した。題して「嘉吉の乱」赤松満祐は赤松家全盛期の4代目である。播磨、美作、備前の三カ国を有する守護大名であったが、故あって時の將軍、足利義教を自邸に招き、突如謀殺するのである。満祐は自邸を焼き払い、この城山城にとって返し、山名宗全以下2万余の幕府追討軍を迎え撃つのだが、理あらず遂に最期は妻子共々一族六十九人がこの地に自害して果てるのである。そう、この地とは我々がべったり座り込んでいた場所である。気が付けば目の前の小さな窪みに、供養塔「三基墓」がひっそりと何と身震いするような歴史冥加ではないか。下山路は下野田に至るかつての兵糧道を下る。谷沿いの路は荒れ放題、だがこれもまた我々にとっては言い知れぬ想いを抱きながらのプロムナードである。ハイキング+歴史探訪、また次回も元気で楽しみましょう。 記:紀伊塾本(節)</p>								
連番	338	例会No. 一般198	内容 丹波富士(牛松山)	実施年月日	2010/6/13	担当者	奥中、本郷	参加者数	
参加者	奥中種雄、本郷善之助、寄川都美子、岸田暎子、横内まみね、田中智子、柴田弘子、小椋美佐、仙谷経一郎							参加者数	9

2010年度(09/11~10/10)EPEクラブ活動報告

2010/10/E現在 板谷

<p>担当者コメント</p>	<p>テレビ、新聞も終日雨の予報、ピンポイントで亀岡市を見ると午後12時位までは大丈夫の予報、降っても1mmぐらい。信じて大阪駅へ向う。大阪駅に集まったのは8名だった。今回の登山コースは亀岡駅発、保津町から牛松山へ登り、千歳町国分へ下山するラウンドコースである。下山後、亀山城築城400年の多くの「幟」に誘われて見学した。登りは登山道と言うよりは金比羅神社への参拝道で、勾配も緩く道幅も広くよく整備されていた。下りは勾配もきつく、NHK送信所の保守点検道の感じがした。展望のよい所は登りに一箇所あるだけで、あとは自然林に囲まれた展望の無いルートである。愛宕神社に「全国愛宕の本宮」鎌倉時代後期1280年頃の建立の表記があった。帰宅後ネットで調べると、東京港区1603年徳川家康の命で建立の愛宕神社、仙台市1591年伊達政宗の命で建立の愛宕神社があった。京都の愛宕神社が本宮との記もあったが、残念ながらホームページを探しきれなかった。機会があれば京都も訪れて関係を確認してみたい。亀山城は明智光秀が天正六年(1587年)頃から築城を始めたと推定されている。その後、時は流れて、明治十一年(1878年)に政府の方針で廃城が決まり、土地建物も転売が繰り返される。大正八年(1919年)に宗教法人・大本が購入し、現在に至っている。今回は受付で見学を申し込み、御祓いを受けて、築城当時の石垣の一部を見学できた。また、赤松や紅葉の木々が大きく立派に育てられて素晴らしい環境であった。亀岡駅15:32発で帰阪した。 記:奥中</p>		
<p>連番</p>	<p>339 例会No. OP134 内容 大江山(千丈ヶ岳)</p>	<p>実施年月日 2010/6/20</p>	<p>担当者 三原、板谷</p>
<p>担当者コメント</p>	<p>梅雨の真っ只中、この時期の例会なので雨は覚悟で車で出発する。二時間余りのドライブで登山口の鬼嶽稲荷神社に到着する。大江山は鬼の伝説で知られ又関西100名山や花の100名山にも選ばれている人気の山である。大江町の町起こしで色々な施設もあり登山道もよく整備されていて、初心者向きの山である。曇り空の下、ムシムシする登山道に行く。ブナや植の自然林の林を抜けると草原の明るい山頂である。天気が良ければ日本海まで見渡せるビュースポットなのに残念だ。ゆっくり休憩をして縦走路を北へ、鳩ヶ峰へ向かう。天気も少しは回復気味で近くは見渡せる様になってくる。途中のコルには立派な休憩所もあり、ここで昼食とする。次の目的地の鍋塚へは草原状の笹の原を山つつじ、薊、しもつけ草等を観賞しながら、ゆっくりと時間を過ごす。今日は雨こそ降らなかったが蒸し暑い一日で充分汗もかいたので酒天童子の湯で汗を流して帰阪する。 記:三原</p>		
<p>連番</p>	<p>340 例会No. 一般199 内容 阿星山</p>	<p>実施年月日 2010/6/20</p>	<p>担当者 秋田、奥中</p>
<p>担当者コメント</p>	<p>今回の阿星山は梅雨の時期の為天候不安定の中当日が来ました。天候の悪さと、交通の不便さ、ルート不明瞭を考慮して長寿寺より登ることにしました。石部駅よりバスで長寿寺(9:57)に。湖南三山・国宝長寿寺は山門には阿星山と書いてあり、国宝らしい静かな重厚な雰囲気のお寺です。登山道は山門横の林道を約20分登るとしめ縄を張った小祠に着く。ここから道は不明瞭になり、細い道を尾根道へ行くと車道に出る(10:44)。駐車場へと三差路を登山口へ向う。ガスの中、笹ユリ輪が咲いていて、近隣ではあまり咲いているのが見られなくなりました。登山口(11:00)。これより木の階段の登山道に登ると「アジサイの丘」の休憩所に着く。名前の由来は分からないがアジサイの花でもと期待していましたが、花は無く残念でした。それどころか風雨と雷鳴の中を山頂手前の「展望の峰」の東屋へ。休憩後、風雨雷鳴がさらに強くなって来ましたが、山頂まで5分なので山屋の性とても言うのか、川のような階段道を阿星山山頂(639m)へ。埋もれた三角点を確認しました。風雨も少しおさまる「展望の峰」より西寺の方向に下山、急な登山道を下ると林道へ、ここからガスの切れ間から三上山、湖南方面が一望でき良い展望でした。後は林道を丸塚まで下り、もとの登山口へ帰りました。ここから車道を下り東寺集会所バス停へ。14:58発に乗車して石部駅に帰りました。 記:秋田</p>		
<p>連番</p>	<p>341 例会No. 一般200 内容 大和・初瀬山から龍王山</p>	<p>実施年月日 2010/6/27</p>	<p>担当者 紀伊本、田中</p>
<p>参加者</p>	<p>紀伊本節雄、田中智子、畑山庄司、畑山禮子、柴田弘子、津川洋子、山下登志子、安本昭久、安本嘉代、奥中種雄、笠松マサエ、西村晶、西村美幸、秋田文雄、寄川都美子、川下淳子、和田良次、和田敬紀伊本博美、大西征四郎、仙谷経一郎、西田保、寺島直子、横内まみね、本郷善之助、磯辺秀雄、山本洋、吉田伸寛、齋藤容子、三浦清江、岸本久仁雄、野口秀也、堀木宣夫、三原博子、三原知未</p>		<p>参加者数 35</p>
<p>担当者コメント</p>	<p>梅雨前線が日本海側に停滞したので、雨こそ降らなかったが、蒸し暑い一日となった。予告とは少し違って、初瀬山と竜王山を結ぶ峠の道路まで、タクシーを利用した。笠荒神の2Kmほど手前で、初瀬山へは往復1時間のところである。参加者は総勢35名、朝から9台のタクシーが出揃うとは、いささか地域活性化にも役立ったかと冗談もでた。まあ賑やかなことは、我々自身の活力にもかかわることだから、うれしいことだ。竜王山で昼食となる。ほどよい山頂の広場は、かつての山城の天守台だから、居心地はよいはずだ。雲は低く垂れ込めているが視界はよく、大和盆地が手に取るように見える。「やっぱり来てよかった」汗みれのなかで、誰もが思う実感である。北西に約10分の位置に足を伸ばすと、この天守(南の城跡)に連立する北の城跡がある。戦国初期、十市一族3代にわたって築かれた連立城跡である。見事な城構えである。だが群雄割拠のあの時代に、松永弾正、筒井順慶など、名だたる豪雄の狭間に文字通り翻ろうされた、一豪族の胸中とは如何なるものだったか。冷風が一瞬、さらりと摺り抜けたようである。午後からは暑さが一段ときびしくなった。いよいよ夏本番も近いかと閉口した頃、本日のプラスアルファ、三輪そうめんの「三輪茶屋」に到着した。豪華な本社家屋の一角で、汚れた山靴のまま入るのは気が引けたが、すぐ誰でも親しくなれるのが年の功である。冷房の効いた、立派なロビーを占有させてもらって、心身とも優雅になったところで、やおら極上の「冷やしそうめん」を戴いた。確かに美味しかった。いや、美味しかったのだが? やや、私共には上品に過ぎたかな(物足らなかったかな)と思うのである。あるいはこれは、あの蕎麦道場で満腹するまで戴いた手打ち蕎麦の後遺症かもしれません。食べ物の記憶はこわいものです。これからも心引き締めて、より上品に、より優雅なプラスアルファをめざしましょう。『汚れたシャツ、破れたズボン、ぼろの岩登り靴をはいてホテルに着いた僕を想像してみたまえ。僕はディナーの席についた。僕は洗練された話し振りと態度をとった。ホテルのテーブルにいた人達は最初こそぶったまげていたものの、次第に僕に好意をしめしてくれたのだ。』これは若かりし頃、バイブルのごとく耽溺した、フランス山岳会の若きアルピニスト、ジャン・コストの遺稿から要約したものです。どうです、いまも凛とした彼の気品、高嶺の花でしょうか。 記:紀伊本(節)</p>		
<p>連番</p>	<p>342 例会No. OP135 内容 比良・八幡谷廻行</p>	<p>実施年月日 2010/7/4</p>	<p>担当者 板谷、大西(征)</p>

2010年度(09/11~10/10)EPEクラブ活動報告

2010/10/E現在 板谷

参加者				参加者数					
担当者	荒天中止								
コメント									
連番	343	例会No.	一般201	内容	ベーシック登山No. 2 京都・鞍馬山	実施年月日	2010/7/11	担当者	秋田、松本
参加者	秋田文雄、松本明恵、寄川都美子、新里トヨ、岩崎憲代、杉本栄子、川下淳子、三原知未、三原博子、田川匡、田川玲子、上原進一、仙谷経一郎、和田都子、藤田喜久江							参加者数	15
担当者	<p>今回の鞍馬～貴船コースはウォーキングに近いコースなのですが、歴史、伝説や逸話の多いエリアなので、ゆっくり見て楽しむ山行予定でしたが、生憎の雨で十分な探索ができませんでした。鞍馬寺山門(仁王門)11:00スタート。由岐神社鞍馬の火祭りで有名な神社です。清少納言の「枕草子」に「近うて遠きもの」として書かれた九十九折坂を登り、茶店・洗心亭11:25。雨が強くなり、これより雨具を着け鞍馬寺金堂へ、正殿前の「六芒星」の中心はパワースポットらしい。天気であれば、比叡山が見えるのだけが残念です。本堂の横より、霊宝殿へ石段を登りきると遮那王堂に着く。これを左に行くくと写真によく写される木の根が地表に露出した複雑な模様の所を通り、大杉権現社12:00。ここで社の中で雨をしのぎ昼食、雨の間に杉の巨木が並び、その空間は神秘的で牛若丸や天狗伝説のロマンに耽りながら、その周りを散歩して木の根道を奥の院(魔王殿)。650万年前、金星から舞い降りた魔王尊(サナト・クラマ)を祀っています。これより下り坂を鞍馬山西門受付所(貴船橋)、14:00に貴船神社本宮7月7日の水の祭りで七夕飾り付けてありました。反正天皇(390年頃)の時代に玉依姫命が黄船に乗って浪速から淀川・鴨川へ上陸したところに水神を奉り祠を建てたのが貴船神社です。次に結社(中宮)御祭神は磐長姫命(いわながひめのみこと)が自らの出来事を恥じて「吾ここに留まりて、人々に良縁を授けよう」と御鎮座した縁結びの神様です。若い人に人気のあるパワースポットです。相生の杉を通り、大杉並木より奥宮に、あとは澄んだ空気と豊かな緑と貴船川のせせらぎを聞きながら貴船バス停に(14:45)着く。これからの山歩きも、その土地の文化、歴史、遺跡などを取り入れて山行すれば、また一味違った山の楽しみ方ができるのではないのでしょうか。 記:秋田</p>								
連番	344	例会No.	OP136	内容	北陸・赤兎山	実施年月日	2010/7/10~11	担当者	三原、奥中
参加者	三原秀元、奥中種雄、宮平良雄、西村晶、長瀬茂正、村浪義光、柴田弘子、安部泰子、小椋美佐、安岡和子、神阪洋子、近藤さとみ、田中智子、寺島直子、安本嘉代、保木道代、西村美幸、山下登志子							参加者数	18
担当者	<p>7月10日 現地集合組も含めて総勢18名が『東山いこいの森キャンプ場』に集結、例の如く夕食は女性軍の手慣れたチームワークで一気に豪華な晩餐となる。泊まりは3棟のバンガローで分宿とする。明日は午後3時頃から雨という予報らしいがここは山の中なので、どうなる事やら・・・ 7月11日 登山口へは有料の小原林道の7時の開錠を待つために少し早めに行く。18名もの団体なのですぐに開けてくれる。ブナの自然林の、よく整備された林道を30分も行くと大きな駐車場のある登山口に着く朝からの霧雨は小雨となってくる。雨具を着けて出発。大長山と赤兎山の分岐の小原峠に1ピッチで上がる。今後の雨の降り方を気にしながら赤兎山の方に向かう。途中大舟山への分岐を過ぎるころよりすピンク色の笹ユリが目を楽しませてくれる。赤兎山のピークに着いたが三角点と方位盤はあるが濃い雨雲が立ち込めて眺望は全く無し、小憩後進路を東にとり避難小屋のある赤兎平へ向かう。途中登山道の右や左にニッコウキスゲがポツポツと現れてくる。笹ユリとの競演や高層湿原もあり高山の雰囲気も少しは味わせてくれる。小屋で昼食後雨風も強くなってきたので足早に小原峠まで戻り次の目標の大長山は中止と決定し下山する。今回の例会のタイトルとは程遠い山行となりましたがタイトルに嘘は無いと思いますのでまた機会があれば挑戦して下さい。 記:三原</p>								
連番	345	例会No.	一般202	内容	鈴鹿・霊仙山	実施年月日	2010/7/18	担当者	大西(恒)
参加者	大西恒雄、奥中種雄、本郷善之助、大西征四郎、安本昭久、安本嘉代、小椋美佐、寺島直子、宮平由紀子							参加者数	9
担当者	<p>まだ山岳会員として現役バリバリの頃、毎年のように伊吹山に冬山トレーニングとして足繁く通っていましたが、その伊吹山の対面にある霊仙山には登ったことがありませんでした。決して無視するような小さな山ではなかったが、トレーニング優先の山行きをしていた頃には、頭の中に入っていなかった。そのまま、今まで山行の機会を逃がしていた山でした。霊仙山には二つのルートが考えられますが、今回は有名な醒ヶ井養鱒場の奥から登る比較的歩き易く時間的にも短いルートです。この時期のJR醒ヶ井駅前には「梅花藻」見学のバスで混雑している。タクシーを頼むが養鱒場までしか行ってもらえなかった。立派な舗装の林道を登山口まで歩く。登山口には標識があり、すぐに休憩所に出会う。ここから沢のような登山道に沿って進むと、いつの間にか屋敷跡の石垣しか残っていない樽ガ畑の廃村の中を進むようになる。青い屋根の休憩小屋「カナヤ」が現れるとジグザグ登りで、汗拭き峠に出る。ここより稜線沿いに案内板に沿って登ると見晴台の五合目、石灰石が現れだし急登一登りでお猿岩(猿には見えないが)に着き背の高い木もなくなる。ここから緩やかな高原状の笹の中を進むようになる。ゆったりと広く、ガスでもかかると読図に自信があっても方向を見失うだろう。琵琶湖の形をしているというお虎ガ池(鳥居がある)を過ぎ緩やかな斜面を登ると経塚山に着く。別ルートからの道に避難小屋が見える。霊仙山は、あと一頑張り。ゆっくりと登ると右に霊仙山、左に最高峰の分岐に着く。先に霊仙山に登り、戻って分岐から最高峰。時間も2時を回っていたので少しの休憩で往路を戻る。頂上付近は人の丈ほどの笹の中を登ると、どの本にも書いてあるが、近年は鹿が増え、食べられて刈り取ったように膝下くらいの長さしかない。鹿の糞も多く、臭いが鼻を突く。最近では醒ヶ井の駅裏にも鹿が出るらしい。休憩所のカナヤでおばさんに車を呼んでもらい、林道に出たところで上ってきてくれた車に乗せてもらう。待ち時間もなく予定よりも早く帰阪することができた。 記:大西(恒)</p>								
連番	346	例会No.	一般203	内容	金剛山・妙見谷	実施年月日	2010/7/25	担当者	奥中、大西(征)
参加者	奥中種雄、大西征四郎、紀伊栞本節雄、岡本佳久、川下淳子、和田敬子、寄川都美子、三原博子、三原知未、安本嘉代、谷村洋子、田中智子、安岡和子、紀伊栞本博美、松本明恵、神阪洋子、西村晶、吉田伸寛、山本洋、堀木宣夫							参加者数	20
担当者	<p>梅雨明けの猛暑の続く中、大所帯の20名で、涼を求めて妙見谷を登りカトラ谷を下って来ました。この谷は4年3月17名、8年7月25名、9年8月21名で、今年で4回目となります。毎回多数の参加者で人気のコースになっています。今年の谷は水量も多く、水も濁り、新しい山抜けもあり、また間伐材も流されて歩くコースに倒木が多くありました。初回から数えて6年の歳月が経っています。谷もその姿を変えています、参加者も同様に歳を取ってきています。一般例会では、過去の記憶や資料にたよらず、直前の下見の大切さを感じました。 記:奥中</p>								
連番	347	例会No.	一般204	内容	武庫川・西ノ谷廻行	実施年月日	2010/8/8	担当者	板谷、大西(恒)

2010年度(09/11~10/10)EPEクラブ活動報告

2010/10/E現在 板谷

参加者	板谷佳史、大西恒雄、保木道代、奥中種雄、小椋美佐、黒澤百合子、寺島直子、安部泰子、長瀬茂正、飛田典男	参加者数	10							
担当者コメント	毎年、初心者でも参加できそうな初級の沢登りルートを物色します。今年は武庫川沿いから選びました。残念ながら初心者の参加は一名だけとなりましたが、沢登りの楽しさを味わって頂けた様で幸いです。ただし、過去の例会中に負傷者が出たのは、沢登りが多いのは明らかです。この点、担当者、参加者ともども、いつも初心に還って慎重に取り組むことを、肝に銘じておかねば、と思っています。次回、8/29の高天谷も初心者でも楽しめるルートと思いますので、多数の参加を期待しております。記:板谷									
連番	348	例会No.	一般205	内容	金剛山南尾根	実施年月日	2010/8/22	担当者	大西(恒)、西村	
参加者	大西恒雄、西村晶、堀木宣夫、本郷善之助、大西征四郎、奥中種雄、笠松マサエ、柴田弘子、神阪洋子、田中智子、小椋美佐、寄川都美子、寺島直子、松本明恵、紀伊榎本節雄								参加者数	15
担当者コメント	金剛山南尾根といえば現役の時の夏山前の定番メニューであった。何故かE.P.E.での夏の例会に定着しつつある。例年より暑く感じる今年の夏、南尾根みたいな長い尾根の歩きは参加者が少ないだろうと思っていたら、15名の参加者があった。予想しない今年の暑さでは短距離とはいえず頂上に登り、そこから長い南尾根を下るという行程はルート軍団には厳しいという思いと事前の助言もあって、頂上を割愛してバス停から直接南尾根の久留野峠に出て、ひたすら紀見峠を目指しました。南尾根は府県境になっていて、要所に大阪と奈良、和歌山に通じる峠がいくつもある。峠では涼しい風を期待したが、生憎とこの日は風が少なかった。幸いにも曇りがちの天気で全員バテることなく歩き通すことができました。記:大西(恒)									
連番	349	例会No.	OP137	内容	金剛山・高天谷廻行	実施年月日	2010/8/29	担当者	板谷、大西(征)	
参加者	板谷佳史、大西征四郎、奥中種雄、柴田弘子、小椋美佐、黒澤百合子、長瀬茂正、安岡和子、本郷善之助、川守田康行、安部泰子、寺島直子								参加者数	12
担当者コメント	金剛山といえば、関西人なら知らぬ者はいないほどのハイキングのメッカ。山屋ならトレーニングの対象くらいにしか見ていないのでは？しかし山なら水の流れる谷が必ずある訳で、谷靴に履き替えて入り込んでみると充分沢登りの対象になりそうな谷が見つかります。高天谷は「近畿の沢登り本」にも取り上げられているくらいなので、廻る人は多いようです。今回改めて初心者、中級者、ベテランを混ぜて訪れてみて、どなたも失望することは無かったようで、その価値を再認識しました。記:板谷									
連番	350	例会No.	OP138	内容	上越・谷川岳縦走	実施年月日	2010/9/5~8	担当者	紀伊榎本、本郷	
参加者									参加者数	
担当者コメント	中止									
連番	351	例会No.	一般206	内容	湖東・雪野山(竜王山)	実施年月日	2010/9/12	担当者	奥中、秋田	
参加者	奥中種雄、秋田文雄、紀伊榎本節雄、本郷善之助、大西征四郎、柴田弘子、宮平由紀子、寄川都美子、青木義雄、山下登志子、笠松マサエ、寺島直子、安田久美子、村浜孝子、神阪洋子、岩崎真美子、長瀬茂正								参加者数	17
担当者コメント	山名からするイメージは一面の雪原ですが、9月の半ばと言うのに蒸し暑い一日でした。おまけに風も無く、南の東屋から北の東屋までは日陰が少なく厳しい里山歩きとなりました。でも、東屋での昼食時、昔話に花が咲き、村浜さんご持参の冷やしそうめんに舌鼓をうつ方々もいて、楽しい語りもありました。熱中症に誰も罹らず無事例会を終了できうれい限りです。記:奥中									
連番	352	例会No.	一般207	内容	ベーシック登山No. 3 二上山	実施年月日	2010/9/18	担当者	秋田、奥中	
参加者	秋田文雄、奥中種雄、松本明恵、杉本栄子、和田敬子、川下淳子、寄川都美子、津川洋子								参加者数	8
担当者コメント	関屋駅で今日の行動予定と自己紹介をして9:44出発する。今日も天気がよさそうで話題に出るのは夏の山行の暑い話ばかり。住宅街を通りR165に出る。これより国道で車も多く、又山に入っても危険が常にあるので、危険に対する予知能力持つことである。ちょっとした観察と注意力で事故から免れることがある。こんな話をして、車の通行量の多いR165から府道703へ入り屯鶴峰の入口へ。奇観な風景に感動し滑りやすい岩場を登る。悪場の通過については若い人のようにはいかず、年代にあった悪場の回避の方法を取らないと不安は取り除けないと歩行説明する。屯鶴峰(ダイトレの起点)から府道703を通り、11:24二上山登山口にはいる。登山道は森林も多く日陰で空気も澄んでいて、歩いていても気持ちが良い。階段を何度か登り下りしながら雄岳・雌岳のピーク太子道の分岐に着く。ここから馬の背はすぐ14:20着。希望者のみ雌岳へ。山頂は三等三角点(474.1m)があり、日時計もあった。(14:20あった)山頂から葛城山、奈良県側の景観を楽しみ、馬の背を14:59下山開始、一気に天台宗祐泉寺に下る。ここは秋の紅葉ごろ散歩に好いところだ。これより舗装路を大瀧寺をすぎ川床公園を横切り、大池の下の道を二上神社口駅の近道を通り、道の駅で休憩して、二上神社口駅16:43着。ここで解散する。記:秋田									
連番	353	例会No.	OP139	内容	奥伊吹・虎子山と国見岳	実施年月日	2010/9/23	担当者	三原、翁長	
参加者									参加者数	
担当者コメント	荒天中止									
連番	354	例会No.	一般208	内容	丹波・愛宕山	実施年月日	2010/9/26	担当者	板谷、三原	
参加者	板谷佳史、三原秀元、寺島直子、近藤さとみ、寄川都美子、安岡和子、和田敬子、杉本栄子、本郷善之助、青木義雄、宮平良雄、長瀬茂正、柴田弘子、田中智子、奥中種雄、西田保、安本昭久、安本嘉代、岸田暎子								参加者数	19

2010年度(09/11~10/10)EPEクラブ活動報告

2010/10/E現在 板谷

<p>担当者コメント</p>	<p>心地良い秋風に吹かれながら、三田市母子の集落を抜ける頃、軽トラが追いかけてきて地区の代表者に呼び止められる。「今の時期はマツタケのため入山禁止にしている、愛宕山へは登らせない」と告げられる。色々交渉の末、市境尾根に出たからすぐの分岐から山頂へは向わず、篠山市側へ降りるという条件で通してもらえることに。愛宕山頂に続く稜線を見送って篠山市側へ林道を下ると、今日の下山予定口である龍蔵寺へ出る。ここの親切な住職に尋ねると篠山市側からはマツタケとは関係なく、自由に登れるということなので、予定変更してここから頂上往復することに。途中で昼食をはさんで、主稜線直下のフィックスロープべた張りの急登をこなすと、愛宕山山頂。篠山城跡を見下ろし多紀アルプスを始めとする丹波山地の展望を楽しむ。再び急斜面の下降の後、龍蔵寺に下山する。後は南矢代駅までの単調な車道歩きが待っていた。今回は事前の調査不足で予定コースの変更を強いられ、30分ほど時間ロスをしましたが、なんとか目指す山頂は踏む事ができました。丹波の山を秋に登るには、マツタケの対策もしないといけないと再認識した次第です。 記:板谷</p>				
<p>連番</p>	<p>355 例会No. OP140</p>	<p>内容 妙高山・火打山</p>	<p>実施年月日 2010/9/29~10/2</p>	<p>担当者 本郷、柴田</p>	
<p>参加者</p>	<p>本郷善之助、柴田弘子、神阪洋子、保木道代、田中智子、奥中種雄</p>			<p>参加者数 6</p>	
<p>担当者コメント</p>	<p>今回の計画は百名山を二山登ると言う欲張ったものでした。出発は夜行列車の寝台を利用し、約5時間程ぐっすり寝ることが出来ました。直江津で信越線に乗り換える、めずらしいスイッチバックで進んで行く。右前方に妙高山が見えてくる。駅前のコンビニで飲料水と昼食用のパンを購入し、ジャンボタクシーで笹ヶ峰に入る。登山口よりきれいに整備された木道を天気を心配しながら歩き出す。木道はブナ林の中を緩やかに登りながら続いている。やがて沢音が聞こえてきて、黒沢に到着する。空は青空が広がってきた、十二曲がりを通りブナ林を抜け少し登ると富士見平だ。さらに黒沢岳の西側を巻くようになると、初めて目的の火打山が見えてくる。三角屋根の高谷池ヒュッテも見える。少しで周りも開けて高谷池ヒュッテに着く。荷物を少し置いて火打山を目指す。ヒュッテの対岸に出て少し登るとロックガーデンになっている。正面に火打山だが昼を過ぎるとガスが湧いてくる。木道を緩やかに下ると天狗の庭に着く。さらに雷鳥平を経てハイ松の繁る拾い尾根を歩く。少し登ると頂上に出た、しかし展望は無し。晴れれば360度の展望、しかし残念、ヒュッテに引返す。夕食は名物のカレーにハインライスのダブルをいただく。紅葉の時期としては少ない登山客であった。翌朝は快晴の朝を迎えた。火打山に朝日があたり、焼山の噴煙も見え、北アルプスの展望もすばらしい。高谷池を前景にした火打山は最高です。今日は妙高山を越えて新赤倉へ出発です。茶臼山から笹原を下ると、黒沢岳の北端に出る。眼下に広々とした黒沢池湿原が広がり、その左の外れに青い屋根の黒沢ヒュッテが見えてきた。これより一登りで大倉乗越に出ると正面に大きく堂々とした妙高山が立ちふさがる。谷を渡ってジグザグに折返しながら厳しい登りが続きやっとな肩に出る。ガスが谷より上がってくる頂上へ、天空は青空だ、でも廻りはガスで展望なし、2445.9mの頂上は広場だ。下山は南峰から、溶岩の岩場を降り笹の繁る急な斜面を降りると、鎖場に着く。さらに降りると天狗堂だ、斜面が緩やかになると林道に出て、ブナ林の中、急な下り坂を通り山腹の左を巻き沢を越えるとスキー場のゲレンデに出た。妙高山のすそ野は広く長い。新赤倉ロープウェイの山頂駅に着いた。民宿の迎えの車で杉の沢へ。明るい感じの良い宿だ。主人夫妻の心のかもった料理を戴く。翌日はのんびり日本の滝100選の一つ、苗名(なえな)の滝へ送迎して頂く、落差55m水量多く見事でした。その後黒姫高原、野尻湖へと廻り妙高山と黒姫山を存分に楽しんでこの山行を終えました。 記:本郷</p>				
<p>連番</p>	<p>356 例会No. 一般209</p>	<p>内容 丹波・西ヶ嶽</p>	<p>実施年月日 2010/10/3</p>	<p>担当者 板谷、三原</p>	
<p>参加者</p>	<p>板谷佳史、三原秀元、保木道代、小椋美佐、寺島直子、近藤さとみ、寄川都美子、大西征四郎、黒澤百合子</p>			<p>参加者数 9</p>	
<p>担当者コメント</p>	<p>先週の愛宕山に引き続き、丹波の山となりました。先週のマツタケによる入山禁止騒ぎに懲りて事前に篠山市の観光課に電話で確認してみたが、「そのようなことは地元の自治会に聞かないと解らない」との返事。ならば自治会の連絡先を教えてください、個人情報なので教えられない」ときた。頭に来てそれ以上は調べないまま、かつて登った時にそのような看板は無かった記憶だけを頼りに現地へ向う。結局そんな山ではなかったのは幸いでした。三嶽、小金ヶ嶽は丹波でも人気のある山域ですし、一度例会にとりあげられたこともあります。今回辿った北からの登路はほとんど登山者と出会うことの無い、静かで丹波の山らしい雰囲気味わえます。あいにく午後からは冷たい雨になりましたが、近づく本格的な秋をおおいに感じる例会となりました。 記:板谷</p>				
<p>連番</p>	<p>357 例会No. OP141</p>	<p>内容 戸隠山</p>	<p>実施年月日 2010/10/9~11</p>	<p>担当者 板谷、安部</p>	
<p>参加者</p>	<p>板谷佳史、安部泰子、保木道代、柴田弘子、黒澤百合子、長瀬茂正、川守田康行、宮平良雄、小椋美佐</p>			<p>参加者数 9</p>	
<p>担当者コメント</p>	<p>10月9日 連休の高速道路渋滞を避けようと三台の車の集合場所や経路を工夫した甲斐も全く無く最後尾車が合計50kmの渋滞を抜けて集合場所に合流できた時にはすでに予定の集合時刻を4時間以上過ぎていた。三重、愛知、更に伊那谷を通過中は豪雨と言えるほどの強い雨でどうなる事かと思われたが長野市街に入る頃には、すっかり止む。なんとか9日中に鏡池駐車場に到着してキャンプ、予定の宴会は中止してビールで明日の健闘を誓い早々に就寝する。10月10日 午前中の天候は期待できない予報であったに関わらず、意外や降りそうにもない雲行きだ。思いがけない幸運にほくそえみながら車一台を戸隠牧場登山口に回送した後、予定通り出発する。時間が経つにつれ日も照る天候となる。P1尾根の核心部は標高差800m余りの両側が切れ落ちた急峻な岩稜であり、迷う事もなく上へ導かれる。9名がザイルを使用した登攀ともなると時間はどんどん経っていくが、慎重を期してじわじわ高度を稼いで行く。約6.5時間を費やしてP1(西岳第一峰)に立つ。ここから先は西岳~八方睨間の縦走路ということだが、一般の登山道とは桁違いの困難さでまだまだ気を許すことはできない。今回の山行中、最も高度感があって困難かと思える西岳キレットへの下降を終えると、本院岳とその先に八方睨のピークが望め、ようやく先が見えたという感じ。だがここに来て雨混じりとなり天候は少し悪化してきたことだし、予定の泊地である八方睨までは今日は届きそうに無い。かといってまともなテント場は全く見つからず、やむを得ず本院岳の狭い頂上で半分ブッシュの上に強引に二張りのテントを張る。テントさえ張ってしまえば、住めばなんとかなる快適な空間だ。いつものように豪華な食事とビールで乾杯、皆の健闘で無事P1尾根を完登でき、心地良く酔う。八方睨まではまだ数箇所重要な通過を残すもののほぼ安全圏内にテントを張ることができた。夜半は下界の灯りが見え星まで出ると思えば時々雨が降る天候。予報では明日は朝から好天が期待できるのだが?</p>				

2010年度(09/11~10/10)EPEクラブ活動報告

2010/10/E現在 板谷

10月11日 山頂からの朝の写真撮影を期待した人には、残念ながらガスに埋もれて視界皆無の朝を迎える。早々に朝食を済ませ出発、時々弱い雨が降る程度だが足元は濡れているので慎重に辿る。本院岳の下降でクサリ場の通過に緊張した他はたいした悪場はないのだが、終始右側がスッパリと切れ落ちた縁を辿るので転倒は許されない。待望の八方睨に立つ頃には晴れ間が出だして感激もひとしおだ。ここからは一般登山者の世界で、流行の山ガールもウロウロしている。すっかり晴れ上がった縦走路を展望を楽しみながら、戸隠牧場へと下った。帰りの渋滞を考えるとあまりゆっくりはできず、鏡池の車を回収後早々に牧場の登山口を出発、帰路につく。だが結局各地で長い渋滞につかまり、全員翌日の帰宅となってしまった。特に女性方は予定外のタクシー代出費の上、翌日の2時帰宅などとなってしまった。山より交通渋滞が恐ろしい例会でもありました。今回登攀した戸隠山・西岳P1尾根はその名のとおり西岳の第一峰に直登するもので、しかもこれを登ってしまうとそのまま降しない限り、なにしろ西岳～八方睨までの縦走路を完登しなければ下山することができない。槍・穂高の縦走路などとは比べ物にならない困難さ、との評価をされるむきもある。今回辿ってみて、総合的に見て決して過大な評価ではないと思った。女性が5名ものパーティであり、時間がかかっても安全優先で取り組んだ。男性も含め、このルートを完登できたことでまだまだやれると自信を持って頂ければ、担当者冥利に尽きるというものです。 記:板谷

連番	358	例会No.	一般210	内容	播州・上月(こうづき)城跡を巡る	実施年月日	2010/10/10	担当者	紀伊栞本、小椋(勝)
参加者	紀伊栞本節雄、小椋勝久、本郷善之助、仙谷経一郎、奥中種雄、神阪洋子、津川洋子、寄川都美子、紀伊栞本博美							参加者数	9
担当者コメント	<p>昨夜来の強い雨も、「上月」の駅ではすでに晴れていた。姫路から姫新線で78分、片道の列車で2時間半も掛けてきたのだから、空模様も味方してくれたのであろう。しかし駅前を出発したのは既に10時30分を過ぎていた。国道373号を南に向かい、寄延川沿いを西に入ると草むらに半ば埋まった小さな石柱に出会う。「赤松円心公廟所」と読めるが、かなり古い道しるべだ。その先に真新しい上月城歴史資料館がある。上月城跡の大手道はその正面になるが、そこはもうただの山道で、往年を偲ぶものはない。入口のすぐ横に尼子勝久、山中鹿之助、その他尼子家臣の上月城戦没者の墓が並んでいる。1578年尼子家再興の夢も空しく、この城で毛利方の大軍を前に2ヶ月に及ぶ籠城の末、家臣の命を救うため切腹して果てた尼子勝久。山中鹿之助は毛利軍に捕らえられ、備中高松城に護送される途中、阿井の渡し場で謀殺されてしまう。悲しい結末である。さて私たちの予定は、山裾を西に寄延川に沿って搦手道から登ることになっていたが、資料館のパンフに、さらに西に進み上月城の裏手のP339m付近から新しく遊歩道が拓かれたとある。で、さっそくそれに乗ることにした。なにしろ今日の歩行時間は2時間の予定だから渡りに船というものだ。ところが1時間ばかり歩いて、目高集落に来てでもそれらしい道標はない。当惑したが、それではやむなしと国土地理院の破線路を頼りに少し強引に(廃道を利用して)尾根筋に出た。そこはちょうど林道と遊歩道の交差したところである。とんだ大搦手廻りに出たものだ。あとは本丸まで約1.5キロ、30～40分ほどの平坦な尾根筋である。だが、歩きながらこの地形の複雑なことに気が付いた。初期の上月城は寄延川を挟んだ北の対岸にあったという。その後この位置に再構築されたようだが、その訳はおそらく、城の搦手の補強と水場の確保が容易なこの地形に着目したからだろう。とはいえ皮肉にもこの城の落城を早めたのは、秀吉軍にその水場を押さえられたことだという。戦勝後、秀吉はこの水ノ手を切った生駒某に多大の報奨を与えている。それだけこの城の水場は複雑かつ貴重なものだったに違いない。これは実際にこの場を歩いてみたものの実感である。上月城本丸跡には13時30分に到着した。さわやかな秋の風が、一枚の重ね着で過ごせる快適な日和で、気分は上々である。片隅に、城主赤松政範ほか三基の古い供養碑が苔むしていた。石碑には、先の尼子勝久から半年ばかり前の、1577年12月、この上月城を本拠とした赤松一族が秀吉軍の猛攻に曝され、そのとき討ち死した主たる武将の名前がびっしりと刻まれている。本丸跡の周囲は雑木に覆われて、残念ながら眺望はない。</p> <p>だが1/2万5千を数枚接ぎ合わせた私特製の地図を広げると、周囲の状況は目の当たりに広がってくる。東正面の眼下には、北から南へさながら大蛇のうねるときき佐用川の屈曲が、天然の要害となって横たわっている。南に目をやると、すぐ下流には千種川が東から南へ並列した形で合流している。しかもこの二本の暴れ川に沿って、数キロ間隔に10指にあまる山城が一族同盟者によって守られていたのである。これはもう戦慄するような強固な防衛線である。そしてその司令塔が上月城である。とても上月城ひとつをとって云々することはできない。歴史家でもなんでもない私の勝手気ままな想像も、これだけで結構楽しいものである。ついながら、2万の大軍で押し寄せた羽柴秀吉軍は、次々と支城を崩し遂に最後となった上月城の周囲に、3重の木柵を嚴重に張り巡らしたうえで、城内一兵残さず惨殺したそうである。赤松政範以下主たる武将はことごとく自刃したが許さず、残る婦女子はすべて国境に遺骸を晒し、見せしめにされたと言われている。それだけ秀吉軍もこの戦いに苦戦したのであろう。尼子勝久、山中鹿之助主従が、この城を秀吉から拝領したのはその直後のことある。城跡の一角に腰を下ろし、今日のサブ担当を務めるO君のミニ講話「山中鹿之助論」を聴く。尼子家の再興を図り、すでに仏門にあった僅か14歳の勝久を擁立し、その後10年にわたって七難八苦を重ねたというが、果たしてそれは主君への忠義と言えるだろうか。鹿之助の隠された野望に翻弄された、尼子勝久こそ哀れだと話をしてくれた。さもあるう、O君の名は正に勝久公と同名である。情が移るといものだろう。話は尽きない、ここはまさに歴史好きにはたまらないメッカである。下山後、立派な歴史資料館(中味はまだ整っていないようだ)に立寄り少し話を聞いた。隣に古いが見事な屋敷がある。昨年の佐用町大水害で5棟あった土蔵のうち3棟が流されたと言う。濁流は佐用川とその西から流れ込む幕山川ばかりではなく、数キロ離れた千種川の合流点から千種川の水が逆流してきたという物凄さである。佐用川の水位は8mも上がったそうで、人口2万の町で20名の犠牲者が出たという。心からご冥福を祈りたい。 記:紀伊栞本(節)</p>								
連番	359	例会No.	一般211	内容	高野山・女人道めぐりと高野三山ー1	実施年月日	2010/10/17	担当者	紀伊栞本、西村
参加者	紀伊栞本節雄、西村晶、安本昭久、小椋美佐、安本嘉代、柴田弘子、寄川都美子、寺島直子、青木義雄、辻角ますみ、高木恵美子、仙谷経一郎、紀伊栞本博美							参加者数	13

2010年度(09/11~10/10)EPEクラブ活動報告

2010/10/E現在 板谷

担当者コメント
10月だというのに、近郊の山では先週までまだダラダラと汗をかいていた。それに比べると高野山はさすがに涼しい。奥の院のバス停からスタートして参道を一步右に入ると、もう誰にも会わない静かな山道が待っていた。高野三山とは、摩尼山(まにさん)(1004m)。揚柳山(ようりゅうさん)(1008.5m)。転軸山(てんじくさん)(915m)と呼ばれ、東から北、南と三方から奥の院弘法大師廟を護るようにしてとり囲んでいる連峰である。三山とも高さも山容もよく似たもので、摩尼山から左回りで辿っていくと、ちょうど我々の足でほぼワンピッチの配分になり1つ1つ登って行くのに都合がよい。明治5年まで、この道が高野山への女人結界の境界とされていた。当時の女人たちはこの道を辿りながら霊地を遥拝したという。正直なところ、私は高野山を山として眺めたことがなかったのでその霊地をとりまく高野三山の存在も、ましてやその峰を辿る道が女人道とよばれる経緯も、すべてにわか勉強で知ったばかりである。三つの山の山頂には、それぞれ小さな祠がまつられていて、独特の雰囲気漂っている。山と山を結ぶ峠の鞍部にも祠があり、巡礼にいそむ白衣の女人たちが、今も彷彿として現れるかのような気配である。そのなかで、北に位置する揚柳山の山頂はとくに素晴らしい。展望こそ望めないが、適度の広さがあり、こだけ広葉樹の混在した明るさがある。紅葉にはまだしばらくだが、並んで弁当を広げる仲間たちの笑顔が、明るさに染まって美しい。この山頂のあじわいは、誰もが久しく忘れていたものを思い出すようだ。転軸山の山頂にも予定通り到着した。こまで2、3名の方と行きかうだけで、ここを下れば一時街の中を通ることになるので、さぞ賑やかなことだろうと思っていたが、なんと寺社道を外れると一人の観光客もいない。ゆっくり鶯谷の住宅街まで来て、民家の裏庭を通り抜けると再度、女人道に入った。ここからP-908mを越えて不動坂口の女人堂に至るまで、またほどよい山道が続き心地よい気分が味わえた。締め括りは、女人堂から不動坂を下って、朱色の極楽橋を渡ると終了である。不動坂は半ば舗装されているが、それでもまあ誰ひとり出合うわけではなし、女人道を巡る最終路は混雑したケーブルで終わるより好しよう。次の機会は、ぜひ雪の高野三山を巡りたいものである。記:紀伊壱本(節)

連番	360	例会No.	OP142	内容	墓谷山と三国山	実施年月日	2010/10/23~24	担当者	三原、翁長
----	-----	-------	-------	----	---------	-------	---------------	-----	-------

参加者	三原秀元、翁長和幸、紀伊壱本節雄、紀伊壱本博美、本郷善之助、神阪洋子、近藤さとみ、松本明恵、小椋美佐、寺島直子	参加者数	10
-----	---	------	----

担当者コメント
10月23日 墓谷山 滋賀県の横山岳はよく知られている山であるが、その隣の墓谷山は気になっていた山であるがその名前がなんとなく気味悪くて行く気になれなかったが、最近この山が杉野富士と呼ばれ端正な形をした里山である事を知り、今回のような1泊2日の山行の1日目の足ならしに調度いい山かなと思い企画しました。杉野のバス停横に駐車させてもらい林道を行くと立派な石碑があり、ここから急な山道に取り付く。しばらく行くと観音堂の境内に入る。相当古そうなお堂で、中には千手観音の私仏が納められているそうです。周囲には相当歴史のありそうな供養塔などが無造作に積み上げてあり戦国時代のものか色々想像させられる。お堂の横より松や檜の針葉樹林帯を抜けて自然林の中の急登をロープをたよりに高度を稼いで行くと頂上にたどり着く。横山岳が大きく北方にそびえ、金糞岳も遠望できる。下山は鳥越峠より杉野へ下る。明日登る予定の三国岳の登山口へ車を走らせ駐車場でテントを張る。10月24日 三国岳 名前の示すとうり福井、滋賀、岐阜の境にあり地図上では重要な山なのであるが、夜叉ガ池を挟んで北の三周ヶ岳が有名で、奥美濃の山の通の人しか訪れない静かな山である。泊まり組は我々のみで一番の出発で小沢を渡り緩やかな登山道に行く。幽幻の滝や昇龍の滝を眺めながら、最後は岩場の急登を上りきると目の前に夜叉ガ池が現れる。夜叉姫の伝説で余りにも神秘的な暗いイメージもあるが意外と明るい池である。未だ朝早いので誰もいない池畔で我々をみのレストタイムとする。三国岳へは南へ最初のピーク迄が急で岩場もあり慎重に行く。此処まではしっかりルートもあるが、これからは身の丈を越す笹藪の中を泳ぐように進んで行く。所々ルートの不明瞭なところもあるが大体踏み跡をはずさない様に行けば三国岳の頂上にたどり着く。展望はもう一つだが、奥美濃の一峰に苦勞して登った達成感に登山の醍醐味を味わってくれたものと思います。夜叉ガ池迄は年間3万人位の方が登るらしいが、三国岳迄来る人はその1パーセントも来ないようです。これからも自分自身の未踏の山に大いにチャレンジして欲しいものです。記:三原

連番	361	例会No.	一般212	内容	六甲山	実施年月日	2010/10/31	担当者	秋田、奥中
----	-----	-------	-------	----	-----	-------	------------	-----	-------

参加者	秋田文雄、奥中種雄、西村晶、田中智子、柴田弘子、和田良次、上原進一、杉本栄子、和田敬子、川下淳子、三原博子、吉田伸寛、仙谷経一郎、寄川都美子、横内まみね、谷村洋子、岸田暎子、安本昭久	参加者数	18
-----	---	------	----

担当者コメント
何年ぶりに芦屋駅に到着、六甲山の人気コースだけにハイカーで混雑の中、18名の参加者で余計に混雑、早々に打ち合わせて出発する(8:15)。住宅街を通り高座の滝へ向う、たいした登りでもないのに一汗掻くと高座の滝に到着する。今では知る人も少なくなったRCCの創設者の一人藤木九三氏のレリーフ前で休憩する。ロックガーデンは、何時きても芦屋浜、青春の血湧かす岩場の景色、そんな思いにしたりながらみんな楽しく風吹き岩に到着(9:40)。雨ヶ峠の道は本来静かな山歩きだが、人が多く中高年が少なく、今流行りの山ガールやランニングする人達で時代の流れを感じつつ雨ヶ峠(10:30)に到着する。雨もポツポツ降り出し本庄橋付近で早めの昼食をとる(11:30)。七曲を傘差しながら登り、紅葉の少ない道を一軒茶屋に到着する(12:34)。昔は入れなかった車道を歩き最高峰に到着(12:49)。一等三角点の説明板によると、平成七年の大震災で12センチ隆起したらしい。地震のエネルギーの恐ろしさを知る。下山(13:00)は本降りの中、有馬温泉へ下山途中の東屋(13:48)で休息後、東急ハーベスト下で解散する(14:33)。温泉に入る人と有馬駅に行く人の二手に別れて下山する。記:秋田

一般例会(新年会含む) : 37回 / 711名 オプション例会 : 19回 / 166名 例会合計 : 56回 参加者総数 : 877名